

KONAN UNIVERSITY

「メディア実践系」授業の作り方(実践編) : 他者から学び, 伝える方法

著者	松川 恭子, 辻野 理花, 西川 麦子
雑誌名	甲南大學紀要. 文学編
号	168
ページ	105-132
発行年	2018-03-30
URL	http://doi.org/10.14990/00003023

「メディア実践系」授業の作り方（実践編）

——他者から学び、伝える方法——

松川 恭子

辻野 理花

西川 麦子

はじめに

『「メディア実践系」授業の作り方（総論）』では、甲南大学文学部社会学科で行われている3つのメディア実践系科目「創作過程論」「メディア文化論」「発展研究F」全体を通してみた学びの特徴、授業を運営していく上での工夫等について論じた。実践編である本稿では、各授業での実践、教員や学生が直面する問題を具体的に紹介する。また、各科目の担当者である松川、辻野、西川は全員、文化人類学を専門としているが、それぞれの異なる現場での調査研究と社会的実践における気づきが、どのように授業に活かされているかについても述べる。本稿の3人の執筆者は、西川が「総論」で述べたように、各授業での活動内容や問題点を、勉強会を通じて共有してきた¹⁾。その過程で、3つの科目がカリキュラムとしてのつながり・まとめ（年次・期別での連続性、メディア関連の実習であるという共通項）を持つだけでなく、「他者から学び、伝える方法」を中心とした授業として相乗効果を生む可能性があることに気づいた。本稿では、特に教室という場所を越えたピアラーニングの営みとしての展開の可能性を最後に論ずる。

本稿における執筆者3人の役割は次のとおりである。松川が「はじめに」「おわりに」と1を、西川が2を、辻野が3を分担執筆し、3人で全体を読み合わせたうえで加筆修正した。

1 「創作過程論」—他者と関わる中で生まれる自分語りの動画

「創作過程論」（2年次担当）は、社会学科のカリキュラムの中では応用領域「メディアコミュニケーションと表現」の科目の1つである。同じ領域の科目に

「映像文化論」「情報社会論」「イメージ論」「サウンド・スケープ論」、本稿で紹介するメディア実践系科目の1つ「メディア文化論」が含まれる。本科目は2014年度から松川が担当している。後述するように前半が講義、後半がパソコンを使った実習科目であり、途中でワークショップ形式の授業も含むため、受講人数に制限を設けている（2014年度～2017年度は40人、2018年度からは35人）。

1-1 デジタル・ストーリーテリング（DST）との出会い

筆者松川のデジタル・ストーリーテリング（以下、DST）との出会いは、2007年に遡る。色々な偶然が重なりあい、その後の筆者の教育・研究を方向づけることになった。それより2年前の2005年4月に筆者は奈良大学社会学部に着任し、本格的に大学教育に携わるようになった。そこで気づいたのは、教育の現場ではレポートや筆記試験などの「読み書き」に重点が置かれ、学生はそれ以外の方法で自己を表現する手段をほとんど持たないということだった。その関心は、インド、ゴア州の多言語状況に関する研究を博士論文にまとめる過程で筆者の中で湧き上がってきたものでもあった。現地語が読み書きよりも、歌や演劇の中の「語り」で生き生きと使われているのを目の当たりにし、大学という場でも、個人の「語り」を引き出せる場があればという意識が芽生えた²⁾。

また、大学で地域連携活動に関わり始め、フィールドワークの間お世話になったゴアという地域に貢献する方法がないかと考えをめぐらせていた時期でもあった。2005年末に博士論文を提出した後、2006年にゴアと奈良に生きる住民の間で、互いの地域について紹介し合い、自らの地域についても理解を深めるような活動ができないか構想した。住民が相互に行き来することは距離的にも資金的にも難しいが、インターネット

を介したコミュニケーションであれば可能だ。公益財団法人トヨタ財団のアジア隣人ネットワークプログラム（以下、「トヨタ財団プロジェクト」とする）に「アジアにおける『市民参加型・マルチメディアによる地域文化発信ネットワーク』の立ち上げインド・ゴアと日本・奈良から始める試み」という課題名で応募したところ、幸いなことに採択され、2006年11月～2008年10月の期間で助成を受けることが可能になった。

この活動のゴア側のキー・パーソンとなったのが、筆者がインド、ゴアで2000年から2001年の18ヶ月間、長期滞在をした時に現地指導教員としてお世話になったアリトー・シークエイラ（Alito Siqueira）氏だった。ちょうど、彼もゴア大学社会学科（Department of Sociology, Goa University）の教員として、実践的教育に関心を持っていた時期だった。教室内では文献講読中心の授業になりがちだが、学生たちにとっては本から得られる知識が自分たちにどのような意味を持つのか、理解するのが難しい。また、学生たちはディスカッションを行う時に、なかなか自分の意見を表明しない。社会学の修士課程³⁾に学ぶ学生たちの中には、社会学を極めたいという学生はほとんどおらず、学位は高校⁴⁾の教員になるために取得するというケースが多かった。どうすればよいのか、シークエイラは試行錯誤を続けていた。

トヨタ財団プロジェクトをゴアで実施するために、シークエイラの知り合いで建築学が専門のヒマンシュ・ブルテ（Himanshu Burte）氏、システム・エンジニアのサリール・コンカル（Sailil Konkar）氏を紹介してもらい、地域発見のワークショップを実施してもらうことになった。ワークショップで撮影した写真や動画をどのようにゴアと奈良の間で共有するのか、なかなか良い考えが浮かばなかった。自前でシステムを構築するには、人手も資金もない。今なら YouTube や Facebook といった SNS を活用するところだが、当時は、YouTube がサービスを開始したばかりであり、外部のサービスを使うというノウハウもなかった。ゴアと奈良をつなぐとトヨタ財団プロジェクトの申請書で謳っていたのにどうすればよいのかと逡巡する中、シークエイラから「大学の学生対象に DST 制作をやってみた」と連絡が入った。最終的に完成までこぎつけたのは、ワークショップの参加者のうち一人だけで、その女子学生、プリーティ・パドガオンカール（Preeti Padgaonkar）氏が制作した作品を電子ファイルで送ってもらった。勉強家として通っていた彼女がカレッジの修了試験に失敗した経験を振り返ったもの

で、彼女の思いが胸に迫ってきた。この作品がきっかけで、筆者も DST を学生と一緒にやろうと思い立った。2008年8月に奈良大学のインド研修旅行を企画し、6人の学生が参加した。ゴアに立ち寄った際にゴア大学の学生たちとの交流会を行い、その後簡単な DST 研修を行った。日本に帰国した後、研修旅行に参加した学生のうち5人と2日間にわたるワークショップを奈良大学で実施し、DST 作品を完成させた。その後、筆者が担当するゼミで DST ワークショップを行い、授業の中でどのようにワークショップを取り入れていくのか試行錯誤する中で経験を積んだ。

DST は、パソコンでデジタル写真、音楽、自分で原稿を書いて録音したナレーションを統合して制作する「自分語り」の動画のことである。近年、スマートフォンにも動画制作アプリが入り、個人が動画を作ることに對して敷居が低くなった。YouTube には、個人が制作した大量の動画があふれている。DST は、単に動画というだけではなく、その制作過程に特徴がある。パソコンに向かって作業するのは個人であるが、「ストーリーサークル」というグループでのワークショップの中で個人の物語を紡いでいく。これは元々、アメリカのデイナ・アチュリー（Dana Atchley）による「ネクスト・エグジット（Next Exit）」と題したアート・フェスティバルにおけるパフォーマンスから始まっている。彼はローカル劇団のプロデューサー兼演劇コンサルタントのジョー・ランバート（Joe Lambert）に出会い、ランバートのパートナーであるニナ・ムレン（Nina Mullen）とともに1994年に「サンフランシスコ・デジタルメディア・センター」を設立した。1998年にセンターはバークレーに移転し、名前を「デジタル・ストーリーテリングのためのセンター（Center for Digital Storytelling, 以下では CDS と記述）」と改め、現在に至るまで DST のワークショップを開催している。CDS 方式は、「誰にでも語るべき物語がある」という考えにもとづき、午前9時から午後5時まで、3日間連続で実施される。ストーリーサークルでのお互いの語りの披露、グループでのパソコンによる作業を経て最後に個人は1つの DST 作品を完成させる。つまり、自分語りだが、他者と語り合い、つながる中で作成するという特徴がある。

CDS の活動はアメリカに留まらず、世界中に波及している。CDS のウェブサイトによれば、“International Health and Human Rights”をテーマとした活動として、アフガニスタンの女性の語りを記録する活動、南アフリカの女性たちの自分語りについての活動、

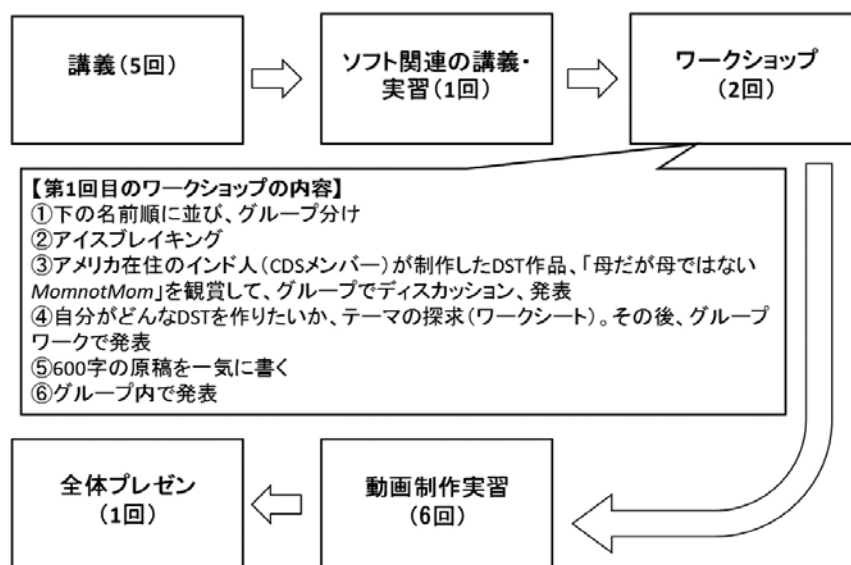


図 1-1 「『創作過程論』授業プロセス」松川作成

エチオピア、ケニア、メキシコ、タジキスタンの先住民の土地・権利・文化についての語りを記録する活動等が紹介されている⁵⁾。

DST は、CDS に留まらず、様々な団体によって世界中で実施されてきた。BBC ウェールズ支局が実施した「キャプチャー・ウェールズ」やオーストラリア、メルボルンの近代アート美術館 ACMI の試みが代表的なものである。日本における DST 実践で、CDS のものに近い形として、愛知淑徳大学メディアプロデュース学部の小川明子（現名古屋大学）等が始めた「メディア・コンテ」の試みがある。大学生を対象としたものでは、三重大学教育学部附属教育実践総合センターの須曾野研究室の活動、明治学院大学文学部芸術学科の授業における DST 作品制作が主なものとして挙げられる。小川は、DST の歴史とともに「メディア・コンテ」での経験をまとめた著作を出版している（小川 2016）。

1-2 DST を授業でどのように実践するのか

CDS 方式の DST 作品制作は、3日間連続のワークショップを行う。DST を授業の中で実施するには、週1回、15回の授業というフォーマットの中に落とし込まなければならない。更に、動画制作はパソコンを使って行うため、関連する最低限の著作権の知識や DST の背景について学生に伝える必要がある。奈良大学時代に10人程度の少人数ゼミで DST ワorkshop を実施した経験はあるが、40人という人数での授業で DST をどのようにすれば実践できるのか。2014年

4月に甲南大学に筆者が着任するにあたって、前年度に構想したシラバスでは、以下のように授業を構成することにした。

- ・講義（最初のオリエンテーションを含んだ5回）
- ・ソフトウェア関連の講義・実習（1回）
- ・ワークショップ（2回）
- ・動画制作実習（6回）
- ・全体プレゼンテーション（1回）

初回のオリエンテーションでは、シラバスの説明をした後に「誰にでも語るべき物語がある」という CDS のコンセプトを紹介し、パドガオンカールの DST 作品（英語でのナレーションだが筆者が訳つけたものがある）、これまでに筆者が実施したワークショップや「創作過程論」の授業で先輩たちが作成した DST 作品を上映する。それにより、履修学生は、授業で何をするのかという具体的なイメージを掴むことができる。続く4回の講義では、YouTube を中心とした個人による自己発信の現状（第2回）、著作者の権利を守る著作権の仕組みにより作品の共有・創造的展開が制限される場合があるという問題（第3回）、著作者の権利のうち一部を認めつつ、他者が作品を利用することを認めることで創作活動の推進をめざすクリエイティブ・コモンズの活動（第4回）について扱う。その後、動画編集ソフトの基本的な使い方を学ぶ講義及び実習を行う。動画編集ソフトは、2015年度に一度 Adobe Premiere Elements 10 を使ったが、2014

年度、2016年度、2017年度は Microsoft 社の Windows ムービーメーカーを用いた。Adobe Premiere Elements の方が動画編集ソフトとしての機能は多いが、本講義を受講する学生の大半が動画編集ソフトを使った経験がないことから、ムービーメーカーの方が操作しやすいと判断したためである⁶⁾。実習回では、インターネット上で集めたデジタル写真を使い、スライドショーを実際に作ることで、ソフトウェアの使い方を学ぶ。その後、ワークショップ形式の授業を経て、どのような物語を語るかを決め、動画制作実習に入っていく。

1-3 ワークショップ形式の授業での工夫、問題

ワークショップは2回行うが、1回目のワークショップが本講義全体で最も重要である。「他者との関わりの中で自己を語る」ベースとなるグループ分けから始まり、原稿のたたき台を完成させるところまでを行う。

それまでの6回の授業は、ほぼ講義形式であるため、いきなり始まるワークショップ形式の授業に学生たちは戸惑う。本講義を履修する全員が社会学科の学生であるが、2年生から4年生まで異なる学年の学生がいる。また同じ学年であっても、学生同士が一度も言葉を交わしたことがない場合もある。CDS方式と違い、ワークショップに割ける時間が限られているため、「遊び」の要素を入れることで、「他者」と関わりやすい雰囲気を作ることを心がけている⁷⁾。通常の講義室に授業を受ける形で座っている学生たちに、席から立って「下の名前のおうえお順に並ぶこと」を指示する。こうすることで、学生同士はお互いにコミュニケーションを取りながら、順番に並んでいく。並び終わった後、順番が正しいか確認し、6～7人ごとにグループを作っ



写真 1-1 「ワークショップの冒頭では、グループ分けのために、名前順に並んでいく (2015年度)」松川撮影



写真 1-2 「書き上げた原稿をグループでお互いに検討し合う (2015年度)」松川撮影

ていく⁸⁾。

ワークショップは、以下の手順で進める。90分間という制限があるため、時間管理を厳密に行う必要がある。前年度に本科目を受けたことがある学生にスチューデント・アシスタント (SA) としての参加を依頼し、資料配布、進行の面でサポートをしてもらっている。

- ①下の名前順に並び、グループ分け (普段喋らない人ともグループになる可能性, 10分)
- ②アイスブレイキング (自己紹介を兼ねる, 20分)
- ③アメリカ在住のインド人 (CDS メンバー) が制作した DST 作品、「母だが母ではない Momnot Mom」を鑑賞して、グループでディスカッション、発表 (グループワーク, 15分)
- ④自分がどんな DST を作りたいか、テーマの探求 (ワークシート)。その後、グループワークで発表 (20分)
- ⑤600字の原稿を一気に書く (10分)
- ⑥グループ内で発表 (残りの時間)

自己紹介を兼ねたアイスブレイキング (②) の後、アメリカ在住の CDS メンバーであるテンモジ・ソウダラジャン (Thenmozhi Soundarajan) が作った、母親と娘の関係についての物語⁹⁾を鑑賞し、英語のナレーションで語られる DST 作品の物語を写真や音楽、ナレーションから推測し、グループで話し合った後に発表するという作業をする (③)。これは、DST 作品が持つ物語の力を学生に感じ取ってもらうとともに、グループワークで「他者との関わり合い」を深めることを意図している。

引き続き、ワークシートを使って、自分がどのよう

な DST 作品を作りたいのか、アイデアを出す (④)。何もないところから物語を構想することは難しいため、CDS のランバートの著作 (Lambert 2009) を参考とし、(1) 人についての物語、(2) 自分の人生の中の出来事についての物語、(3) 場所についての物語、(4) 自分が今、やっていることについての物語の 4 種類の中から選ぶように学生に伝える。ワークシートでは、物語を考えるにあたって、いくつかのヒントを出す。例えば、(1) 人についての物語であれば、「愛する人、インスピレーションをもらった人、認めてもらいたいと思った人、私たちににとって誰かとの関係は大切である」というランバートの著作からの引用に加え、「ペットとの関係でもよい」と補足し、質問に回答する形でワークシートを埋めるように促す。他にランバートが著作で提示しているのは以下のような問いである。

- その人 (たち) とあなたとの関係はどのようなものなのか。
- その人 (たち) をどのように描写できるか (身体的特徴、性格など)。
- その人 (たち) の性格が良く表れる出来事があるか。

ワークシートが大体埋まったところで、600字の原稿用紙を配布し、一気に原稿を書くように伝える (⑤)。レポートを執筆する時のように推敲しながら書くというのではなく、心の中の思いを吐露するために、10分間で「一気に書く」というのは大事なポイントである。途中までしか書けなかった学生がいても、時間が来たら書く作業をやめ、グループで検討するという作業を行い、ワークショップの1回目を終了する。

翌週のワークショップ2回目までに600字の原稿を完成させてきて、グループに分かれた後、再びアイスブレイキングを挟んで、お互いに原稿を読み上げ、どのような写真を使おうと考えているのか、構想を述べ、グループのメンバーからコメントをもらう。その後、パソコン実習室に移動し、原稿を Word に打ち込みながら再修正する。原稿が完成した後で物語の構成を考えるため、過年度の DST 作品をいくつか観賞し、ストーリーボードの用紙に自分の物語に合わせた写真と物語の流れを書きこむ。この作業が終わると、実際の動画制作実習に移っていく。

2017年度までは、講義用の教室でワークショップを行っていたため、学生の移動の動線に制限がかかる、グループで座って話づらいなどの問題はあったが、学生たちは「面白い授業」と捉え、前向きに授業に参

加するという姿勢が毎年みられた。当初はお互いに話づらい雰囲気があったグループも、アイスブレイキングの後は随分打ち解けて話が盛り上がる。2018年度以降は、アクティブ・ラーニング仕様の教室¹⁰⁾で講義・ワークショップともに行う予定であるため、更に良い効果が生まれることを期待している。

1-4 動画制作実習での問題

ワークショップの回の前に一度ソフトウェアを使っているため、ソフトウェアの操作についての問題はそれ程みられなかった。DST 作品を作るための写真の中に、個人の子どもの頃の写真を含めるとよいとアドバイスしたため、プリント写真を持参した学生がいたが、その場合は筆者がパソコン実習室備え付けのスキナーでデジタル化した。DST 作品制作の過程で一番難しかったのは、ナレーションを録音する作業¹¹⁾である。録音は大半の学生がスマートフォンで行う¹²⁾。自宅でやってくるように指示をしたものの、多くの学生は大学の空き教室を利用して録音作業を行った。想定外の作業としては、スマートフォンのどこに録音した音声ファイルが保存されているのかわからず、学生の端末を USB ケーブルで直接パソコンにつなぎ、ファイル探しを手伝ったこと、異なる携帯電話会社の端末によっては、ソフトウェアで読み込める MP3 形式のファイルとして保存されておらず、フリーのファイル変換ソフトを活用して、MP3 ファイルや WAV ファイル (MP3 ファイルに変換するとムービーメーカーにうまく読みこめない場合があった) に変換する必要が生じたことが挙げられる。

ムービーメーカーの前のバージョンでは、音声ファイルを一度の編集で一つしか使うことができなかったため、画像ファイル、ナレーションの音声ファイルを統合して動画ファイルに書き出した後、そのファイルを再度読み込んで BGM の音楽ファイルを付けるという作業を行っていた。この手順だと、動画ファイルの書き出しの後にナレーションの音声のボリューム変更ができず、BGM の音量との調整が難しいという問題があった。2016年度に2012年のバージョンがパソコン実習室で使えるようになった。その結果、ナレーションと BGM の音声ファイルを一度に読みこんで、動画ファイルの書き出しを行うことができるようになり、作業がスムーズに進むようになった。

BGM 用の音声ファイルは、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスで公開されているものを各自が探してくる。クリエイティブ・コモンズが定めている形に



写真 1-3 「パソコン実習室での編集作業（スマートフォンから写真ファイルをダウンロードする）（2015年度）」
松川撮影

沿って、誰の作品を利用したのかをエンド・クレジットで記すようにしている。

編集後に動画ファイルを書き出す際に、大学のサーバーで各学生のアカウントに割り当てられている容量が限定されていたため、学生が他の授業の課題や個人の画像ファイルを保存していた場合、動画ファイル保存のための容量が足りないというケースもあった。この問題については、USBメモリに書き出したファイルを保存するという形で対処した¹³⁾。

技術的な問題以外に、学生の間にもみられる作業の進行具合の差の調整は難しいところである。動画編集作業は初めてでも、コンピューターの操作に長けた学生はどんどん作業を進めていく。そのため、早めに作業が終わり、手持無沙汰な時間ができた学生もいた。進行が遅れた学生は、時間外に作業を行った。学生間の作業にかかる時間の差の問題はあったものの、ワークショップの班ごとにまとまって座った学生たちの間では、教員に質問する前に他の学生にわからないことを尋ねるといった助け合い（ピアラーニング）がみられた。パソコンの作業プロセスの中でも、物語の検討や写真の選定の部分でもっとグループワークの要素を増やす、コンピューターを使える学生に対しては、DST作品の完成度を高める方法（写真の加工やコラージュ作成等）を個別に教える等、実習の進め方について更なる検討の余地はあると考える。

1-5 全体プレゼンテーション

最後の授業で全員のDST作品を講義室で上映する前に、班のメンバーで作品を共有する。14回目の授業前に履修学生はDST作品を提出する。筆者が、班ごとに作品をフォルダーに分けてMicrosoft OneDrive

にアップロードし、フォルダーを共有してリンクを取得する。甲南大学のポータルサイト、My KONANを通じて通知されたリンクにより、学生は自分の班のメンバーのDST作品を各パソコンで視聴する。視聴後、メンバーの作品についての感想（良い点、改善した方がよい点）をレビューシートに記入し、メンバーに渡す。DST作品制作のプロセスを授業に落とし込む上で、ストーリーサークルにおける「他者との関わり合い」をできるだけ作るための工夫である。

最後の授業では、最初に全員のDST作品のタイトルを記したプリント¹⁴⁾を配布し、一番良いと思った1作品に投票することをアナウンスする。その後、受講生のDST作品を一気に上映する。ワークショップの回まで残った学生は、2014年度から2017年度まで、全員が作品を完成させている。視聴と投票の後、1位から3位までの作品を発表する¹⁵⁾。学生は、全体プレゼンテーションの感想をリアクションペーパーに書くとともに、後日提出が求められるレポートでは、DST作品を制作するプロセスで感じたこと、他の学生のDST作品についての感想をまとめることとなる。レポートの中には、「いい作品は、音量の調整がうまくいった」「もっと細かい点まで気を配って作ればよかった」「色々な点で他の学生のDST作品に触発された」とするコメントが多くみられた。

1-6 制作されたDST作品の公開の問題

制作されたDST作品について、公開の可否、公開する場合に制作者の名前を出すかどうか、学生本人の判断を把握するために最後の授業でアンケートを実施している。公表の範囲は、「創作過程論」の授業内やオープンキャンパスの模擬講義での上映、社会学科が運営している「社会調査工房オンライン」への掲載に限って依頼している。例年、半数ほどの学生が公表してもよい、と回答している。

DST作品は、家族とのパーソナルな関係を扱っているものもあり、そのような場合、公表に躊躇する学生が多い。自分以外の友人が写り込んでいる写真を使ったものをどのように扱ってよいかと考える学生もいるため、公開に関わる問題についてまとめ、学生に周知する必要があると考える。ただ、公開を念頭に置いてDST作品を制作するとなると、物語が限定されたものになる可能性もある、その点は悩ましいところである。

1-7 「身近な他者」との関わりで生まれるもの

「創作過程論」のDSTワークショップ、パソコンを使ったDST作品制作、全体プレゼンテーションという一連のプロセスで筆者が常に意識してきたのは、以下の点である。週1回の授業時間、既存の教室空間という制限がある中、「身近な他者」である他の学生たちとの関わり合いを通じて、学生たちが自分自身の心を開き、自身の新たな一面（自分にも語るべき物語があるということ）に気づく仕組みをどうすれば実現できるのか。試行錯誤の結果、ワークショップの中でグループワークを絶え間なく行って学生同士の関わりを濃くし、個人の編集作業に移った後も班のメンバーの存在を意識することができる形をとるようになった。他者の存在を意識することは、自分の物語をわかりやすく伝えようという意欲につながり、その結果完成したDST作品には、新たな自分の一側面が現われるようになる。

全体プレゼンテーションでは、全ての作品を上映することで、「個人の物語」にも様々な形と表現の方法があることを学生は学ぶ。また、大学で授業を受けていただけでは知りえない多面的な他者の姿を知り、他者理解の深化にもつながる。筆者自身が、授業やゼミではわからない学生の一面をDST作品を通じて知った結果、学生に対する理解が深まり、他の授業でコミュニケーションがとりやすくなったと感じている。自分を開き、語ることを通じて学生同士だけでなく、教員と学生との理解が促進される¹⁶⁾。他者から学ぶことで、自分が成長できると知ることは、「創作過程論」以外の授業、例えばゼミでの協働作業を円滑に進めていく上で役に立つだろう。そして、更に先にある卒業後の、社会における様々な人々との関わりにもそれは応用できるのではないだろうか。

2 「メディア文化論」—国内外の地域メディアと連携した番組制作・発信

「メディア文化論」（2年次配当）は、文学部の地域連携講座科目の1つであり、社会学科と他学科からも受講することができる。「コミュニティメディア」をテーマとして取り上げ、日本だけでなく海外の地域メディアを事例として紹介し、マスメディアとは異なるオルタナティブ・メディアの役割や機能、可能性を考えるという内容である。2012年度から西川が担当している。当時は、一般の教室で講義を中心とする授業を行っていたが、試行錯誤を重ねながら実習を取り入れ

てきた。2015年度からは、西川と辻野が共同担当し、国内外の地域メディアと連携して、ラジオ放送と動画配信の番組を実際に制作、発信する実習を行っている。2では、こうした経緯も含めて、「メディア文化論」を事例に、メディア実践を取り入れた授業の作り方を紹介する。

2-1 米国のコミュニティラジオ局で日本語番組を担当

筆者西川は、「総論」で述べたとおり、アメリカ、イリノイ州に1年間の在外研究中、NPOのアート・メディアセンター（Urbana-Champaign Independent Media Center, UCIMC）の活動に関わり、センター内にあるコミュニティラジオ局WRFUにおいて日本語ラジオ番組を始めた。英語圏において日本語というマイノリティ言語を用いて、番組制作に関わりながら地域内外にどのような関係を作り出すことができるのだろうかと考え、「ローカルなメディアをグローバルに開き多文化接触のメディア空間を創る」というコンセプトのもと、2011年4月より、インターネットを利用して日米をつなぐ毎週1時間の生放送のトーク番組、HARUKANA SHOWを開始した¹⁷⁾。日米在住のスタッフの協力を得て番組は継続され、2018年1月5日現在、355回の放送を重ねた。アメリカ人スタッフがWRFUのスタジオで機材を担当し、西川が番組進行役をつとめ、アメリカ、日本、韓国から8名ほどが番組制作に関わっている。

WRFUは、UCIMCへの会費と寄付とボランティアの活動によって運営されている。ラジオ局のスタジオは、会員による「手作り」であり、そこで使用されている機材も、番組制作のスキルも限られているが、情報媒体へのアクセスの垣根を低くして、誰もが表現、発信できる開かれたメディアをめざしている。番組制作を教える専門の講師やメディア関係者が勤務しているわけではない。一般の住民が、ラジオ局のスタジオに入りそこからは見えないリスナーを想像しながらマイクに向かって語る。その営みをとおして、自分を表現し他者に伝える方法を仲間と学び合う。アメリカのコミュニティラジオ局から配信、放送される日本語番組においては、出演者もリスナーも、日本語を母語として日本文化に馴染み、日本社会で生活している人とは限らない。ここからグローバルに発信してゆくには、さまざまなゲストに対応し多様なリスナーを想定した言葉へのセンスが求められ、時には意味や背景を丁寧に説明する必要がある。毎週の番組制作が、多文化社会でのフィールドワークの現場である。筆者は、2011

年9月に在外研究を終え日本へ帰国した後、番組制作とコミュニティメディアに関する調査研究を続けるなかで、「この異文化接触のメディア空間を、甲南大学の教室とつなぎ、他者に伝えて学ぶメディア実践を授業に取り入れることはできないだろうか」と考え始めた。

2-2 「多文化接触のメディア空間」を教室とつなぎ

2012年度より「メディア文化論」を担当し、北米の「パブリック・アクセス」の思想や制度、筆者のアメリカでのメディア実践を紹介し、また神戸市にある地域メディアの関係者にゲストスピーカーとして講演を依頼した。当時は1年次配当の科目であり受講生が120人前後であったが、地域に関するフリーペーパー作りや番組の企画を考えるなど、一般の講義室でも行いうるグループワークをとおして、地域のメディアについて身近に考える工夫をした。

2014年度からは、2年次配当となり受講生が減り、実習が行いやすくなった。そこで7グループ（8人前後）が、「アメリカのコミュニティラジオ番組で自分たちの暮らしを紹介する」という企画を練り、教室でラジオ・トークを披露し、その録音の一部を HARUKANA SHOW のなかでも放送した。この実習は、学生にとっても、筆者にとっても、日本社会や文化の「当たり前」を身近な暮らしのなかから見直す機会となった。

たとえば、2014年10月2日に放送した「日本語の一人称の多様さ」（21分44秒）では、兵庫県、広島県、熊本県と出身が異なる7人（社会学科、歴史文化学科、英語英米文化学科）が興味深いトークを展開し、番組ウェブサイトにも次のように説明している。「今回、ラジオ番組を制作するにあたり、一人ひとりがテーマを持ち寄り、みんなが一番関心を持った『日本語の一人称の多様さ』について話題にすることにしました。このテーマで話し合う中で、自分たちが日常生活の状況に応じて、様々な一人称を使い分けていることに改めて気づくことができ、新鮮な気持ちでテーマに取り組むことができました。録りなおしを繰り返す中で、日本語の一人称という自分たちの身近なテーマを、それぞれの経験にもとづき、話題を膨らませながらトークを展開していきました。他国の友人、日本語以外の言語の教師から、それぞれの母国語の一人称の種類などについても尋ねました」¹⁸⁾。

教室で、学生たちが繰り広げる模擬ラジオ番組は、「目に見えない他者（アメリカのラジオ番組のリリスナー）に対して語る」ことにより自分たちの日常を再発見

し、彼らの生の語り合いが、教室での想像上のメディア空間にある種のリアリティを生み出している。日本から送られてきた学生たちのトークを受けて、HARUKANA SHOW では、アメリカ在住の日本人スタッフが、日本語の多様な一人称がもつ言葉のニュアンスを英語に翻訳することの難しさについて現地での経験を話した。

2014年度の「メディア文化論」における実習をとおして、HARUKANA SHOW の多文化接触のメディア空間を教室という場所につなぎ、「他者に伝えながら学ぶ」アクティブ・ラーニングを展開しようと考えた。

2-3 国内外の地域メディアと連携し学外へ発信する

2015年度から「メディア文化論」を辻野と西川が共同担当し、より本格的な番組制作の実習を始めた。辻野は、本稿3で詳しく述べるように、甲南大学では、2012年度から非常勤講師として「発展研究F」の映像制作の授業を担当し、また、「ひがしなだコミュニティメディア」（HCM、神戸市東灘区）のスタッフとして、2012年10月から始まった MEDIA ROCCO の番組制作にも携わってきた。

辻野と西川が組むことによって日米の異なる背景からコミュニティメディアについて考えることができ、また、複数の教員が共同担当することで学内外の複数の教室や場所をつなぎ実習が可能となった。受講生は、地域メディアについての概論を学んだうえで実習では、MEDIA ROCCO（A班）か HARUKANA SHOW（B班）のいずれかを選択する。A班は、学内の教室か HCM のスタジオで MEDIA ROCCO の番組の特集コーナー（15分）を制作、配信し、これを他の受講生は別の教室で視聴する。大学がある地域で住民に向けて配信される番組を企画するには、特集のテーマのアイデアを出すだけでなく相当の情報収集が必要となる。B班は、アメリカの WRFU のスタジオと大学の教室をインターネット映像通話サービスで接続し教室から番組のトーク（15分）を制作し、これを WRFU のスタジオで受信して現地からラジオ放送し、その番組制作の様子を他の受講生は別の教室から視聴する。

授業での番組制作は、辻野と西川がそれぞれ、MEDIA ROCCO や HARUKANA SHOW で実施している仕組みと基本的には同じである。MEDIA ROCCO では、毎週土曜日の午前11時から1時間、HCM が借りているスタジオ空間（神戸市東灘区岡本、以下 HCM スタジオと記す）から定期配信を行い、また神戸市内、時には市内を越えて兵庫県内の各地に赴き取材、配信

も実施している。HARUKANA SHOW については、西川が毎週土曜日午前9時（夏時間は8時）に自宅のパソコンからインターネット映像通話サービスを使い、アメリカの WRFU スタジオのパソコンにつなぎ、1時間番組の進行役をつとめている。それぞれの番組の制作の場所を甲南大学の教室に移せば、学生による番組制作・発信ができるはずだ、と考えた。

A班の実習では、2015年度は、「総論」でふれた社会学科の社会調査工房プロジェクトの一部を MEDIA ROCCO の番組制作のためのスタジオとして利用し、普段の配信と同様に、ビデオカメラにライブシェル¹⁹⁾を接続し、映像を Ustream へ配信する方法を試みた。ところが、臨時のスタジオがある建物では構造上、Wi-Fi がつながりにくく、実習の本番では、せっかく作った番組をうまく配信することができなかった。

B班の実習では、WRFU からの協力を得て、授業時間帯に合わせて HARUKANA SHOW の特別番組の放送枠をもらい²⁰⁾、教室と WRFU のスタジオをインターネットでつないで学生たちのトークを現地のラジオ局から生放送しようと試みた。2015年度は、甲南大学の2つの教室と WRFU の3箇所のパソコンを Skype²¹⁾でつなぎ、番組を制作、現地で生放送し、その様子を、別の教室のパソコンの Skype 画面をプロジェクターでつないでスクリーンに映した。ここでも、安定したインターネット接続が課題として残った。

一方、アメリカのコミュニティラジオ局 WRFU が、2016年1月より、ラジオ放送だけでなく、ストリーム配信を開始した。それまで、電波塔から半径10kmほどの限定された地域でしか聴取できなかった放送が、WRFU サイトにアクセスすれば世界中から同時に受信できるようになった。地域メディアの意味と可能性を考えるうえでは大きな出来事である。「メディア文化論」の実習においても、教室と WRFU のスタジオをつないで放送した番組を、学生が自分のスマートフォンで受信して聞くことができる、という状況になった。まさにライブな番組制作・発信・受信の体験であるが、これを実践するためにはより安定したシステム環境が求められる。何十人という学生が一斉にインターネットを利用すると回線が混雑し接続が難しくなる。大学で利用できる機材やシステム、空間をどのように使い、昨年度までのトラブルを解決して、メディア実践の実習を実施することができるのか。

2-4 学内の関連部署との連携

2016年度後期、同様の問題を抱えるメディア実践系

科目の担当者が集まり「ピアラーニングについて考える勉強会（以下「ピアラン勉強会」と略す）を開始し、教職員に参加を呼びかけた。「総論」で述べたように、自主的な勉強会での情報交換と率直な議論をとおしてさまざまな「事情」が分かり、また教科書がない「授業作り」をすすめるうえで、参加者にとっては実践的な学びの場となった。たとえば、第5回（2016年11月24日）の勉強会「地域と連携しながら、学外へ発信する」では、辻野が「メディア文化論」の MEDIA ROCCO の番組制作・配信について2015年度の実習での問題点について話した。

「去年は、社会学科のコモンルームを MEDIA ROCCO の番組制作スタジオとして使い、① Ustream 配信（ビデオカメラ&ライブシェル）の有線 LAN、WIMAX 接続、②持ち込みパソコンの konan-net 接続を試みたが、うまくいきませんでした。今年は、学内での番組配信を諦め、学外にある MEDIA ROCCO のスタジオを借り、そこで番組制作と Ustream 配信を行う予定です。ところが、これを受信する523教室のインターネット接続が不安定です。11月24日の授業では、アメリカのラジオ局と2つの教室を複数のパソコンからネットに接続しようとしたのですが、konan-net に接続するのに50分ほどかかりました」（第5回ピアラン勉強会記録）。

この問題に対して、勉強会に参加した情報システム室のスタッフは、次のように説明した。「学内のネットワークには、3つのセグメントがあります。① konan-net による接続、② eduroam による接続、③ IP アドレスに登録した機器からの接続。それぞれについて、次のような問題、特質があります。①認証システムが接続の数に追いついていないという問題。学生がスマートフォンで一度に konan-net にアクセスすると接続しにくくなる。②利用者が少なく接続しやすいが、研究室と共用エリアのみで講義室では使えない。③ IP アドレスに登録した機器は安定的にネットにつながる」（同上記録）。

2016年度の「メディア文化論」の実習では、MEDIA ROCCO の番組制作・配信については、ピアラン勉強会において、情報システム室スタッフから学内の教室のインターネット環境の現状説明を受け、2015年度とは異なる配信の仕組みをとることにした。つまり、学内の教室を臨時スタジオとして使用するよりも、ライブ配信場所は HCM スタジオで行い、視聴ルームのみ大学の教室を使うというシンプルなものである。このセッティングで実施するほうが現状ではベストと判

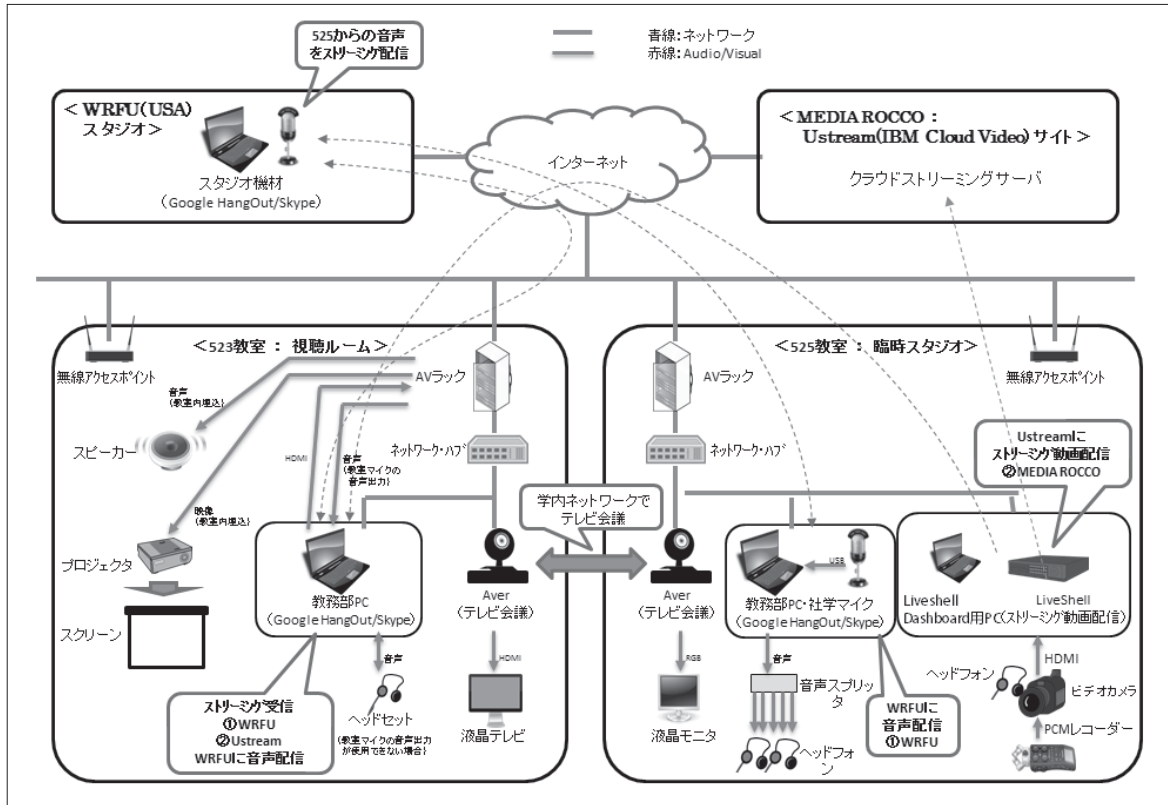


図 2-1 「2017年度『メディア文化論』実習構成概要図」甲南学園情報システム室作成

情報システム室

- 固定IPアドレスの発行 x5 (Aver x2、教務部PC x2、LiveShell x1)
- ネットワークハブ x2
- LANケーブル x8 (予備を含む)
- Aver x2、液晶テレビ x1、液晶モニター x1
- LiveShell x1
- ヘッドセット x1

社会学科

- 教務部PC x2 (教務部から貸出)
- マイク x1
- ビデオカメラ x4 (523、525記録用)、三脚x2
- 音声スプリッター x1、ヘッドフォン x6
- ICレコーダー 5台
- 延長コード(教務部貸出)
- その他必要物品

MEDIA ROCCO

- ビデオカメラ x1
- ZOOM PCMLコーダーx1
- LIVESELL(予備)x1
- 音声ケーブル、延長コード
- WIMAX(予備)x1
- Liveshell Dashboard用PC(予備)x1
- その他必要物品

日程 (10:00~12:30)	①WRFU	②MEDIA ROCCO	情報システム室サポート
11/30(木)	機材・接続リハ	機材・接続リハ	設置レクチャー
12/7(木)	機材リハ(学生のみ)	機材リハ(学生のみ)	(最初のみ立会い)
12/14(木)	本番リハ	本番リハ(ライブ配信)	
12/21(木)	教室本番(生)①②③		立会い
12/28(木)	チーム別本番④		
1/4(木)	チーム別本番⑤		
1/11(木)		本番ライブ(生)	(最初のみ立会い)
1/18(木)		本番ライブ(生)	(最初のみ立会い)

※立会いのない日でも、なにかあれば臨機応変にサポートします(冬休み期間を除く)。

※期間中、機材一式を5号館2階機械室に収納します。情報システム室の担当者が、授業前・授業後に開錠・施錠します。

冬休み期間

図 2-2 「2017年度『メディア文化論』準備物&日程」甲南学園情報システム室作成

断し本番に臨んだ。この結果、当日のライブ配信自体はスムーズに進んだが、臨時スタジオを大学内に設定したライブ配信は、翌年度の課題とした。

一方、HARUKANA SHOW の番組制作については、情報システム室へ協力を依頼し、2つの教室で利用するパソコンにIPアドレスを割り当てた²²⁾。これによって、多数の学生がスマートフォンでwrfu.netにアクセスしても、教室と学外をつなぐパソコンの安定したインターネット接続が可能となった。また、システム・エンジニア（SE）に授業支援を依頼し、テレビ会議システム AVer を設定し、2つの教室の様子を相互に観ることができるようになった。この年の実習は、2つの教室間や、学内外の接続については前年度より安定した環境を確保することができたが、実習の本番では、社会学科で準備したパソコンやマイクの接続などのトラブルが生じ、課題が残った。

2017年度は、前年度の実習での課題を含め、事前に関係部署と相談し、準備をすすめた。また、第16回（2017年11月9日）「ピアラン勉強会」では、「メディア空間の創り方～複数の教室と学内外をつなぐ」というタイトルで、国内外の地域メディアと接続した番組制作と配信について話題にし、情報システム室、教務部、文学部の職員と教員と学生（「メディア文化論」SA）の10名が参加した。この勉強会后、西川と辻野は、情報システム室に「メディア文化論」の実習での学外との接続に関する支援申請書を提出、また教務部には実習に用いるパソコン2台の貸し出しと必要なソフトウェアをインストールする依頼書を出した。今後、受講者数が中規模クラスの科目においても実践的な授業を行うためには、社会学科の社会調査工房プロジェクトのメディア機器のみを頼ることが難しくなると考え、大学が授業用に貸し出している機器の利用の可能性を知りたいと考えた。

その数日後、情報システム室から PowerPoint の2枚のスライドが送られてきた。1枚は、「メディア文化論」の実習において、学内の2つの教室と学外（WRFU スタジオ、MEDIA ROCCO の Ustream サイト）をつなぎ、番組を制作、配信するのに必要な機材とネットワークの「構成概要図」であり、もう1枚は、そのために、どのような機材が必要であり、情報システム室、教務部、社会学科、MEDIA ROCCO が何を用意し、どのような日程で行うのかが分かる「準備物」と記された図である。この2枚の図は、教室という場所から番組を制作し配信する仕組みを作り、理解するための貴重な教材である。学生たちが、番組の企画や

制作だけでなく、実習のなかで起きるさまざまな問題にも自分たちで対処しやすくなる。また、学内外をつなぐ他の授業作りにも応用できる。

勉強会の翌週、「メディア文化論」の科目担当者西川と辻野、情報システム室、教務部、文学部職員が参加した打ち合わせを行い、この図をもとに、実習の機材、システム、分担、日程を話し合った²³⁾。2017年度は、MEDIA ROCCO の番組制作も、大学内の臨時スタジオを使用することとし、情報システム室、西川、辻野が、この日の議論をもとに加筆、修正して、図 2-1、図 2-2 ができあがった²⁴⁾。こうして、「大学の教室を使い、『臨時スタジオ』と『視聴ルーム』を作り、国内外の地域メディアと接続して番組を制作する」という試みの全体像が図示され、これをもとに異なる場所、立場の人々が情報を共有したうえで連携、分業がしやすくなった。

2-5 授業構成と実習—主体性を引き出す

2017年度のメディア文化論15回の授業構成は次のとおりである。

- ①コミュニティメディアについての概論（5回）
- ②番組制作の方法とプロセスについての講義とグループワークによる企画立案（4回）
- ③機材、接続の設営レクチャーと番組制作のリハーサル（3回）
- ④番組制作・発信の本番（3回と冬休み）

前年度までの受講生からの「番組制作にかかる時間を増やしてほしい」という声を反映して、①の西川と辻野によるレクチャーの回数を1回減らし、③に情報システム室による「設営レクチャー」を新たに設けた。ここでは、②以降のグループワークによる実習の進め方を中心に紹介する（図 2-3、図 2-4 参照）。

まず、5回にわたる概論①の終わりに「中間レポート」の課題をだし、その後の実習への参加の意志を確認した。受講生は、MEDIA ROCCO の動画配信と HARUKANA SHOW のラジオ番組の配信・放送を試聴して批評し、実習において自分が希望するA班（MEDIA ROCCO）かB班（HARUKANA SHOW）の番組特集（15分）の企画書を作成した。この年度は、「メディア文化論」に41名が受講登録し、38名がレポートを提出したが、そのうち2名は、所属する運動系クラブの試合などが重なり、実習への参加が難しいと判断し辞退を申し出た。残る36名のうち、16名がA班を

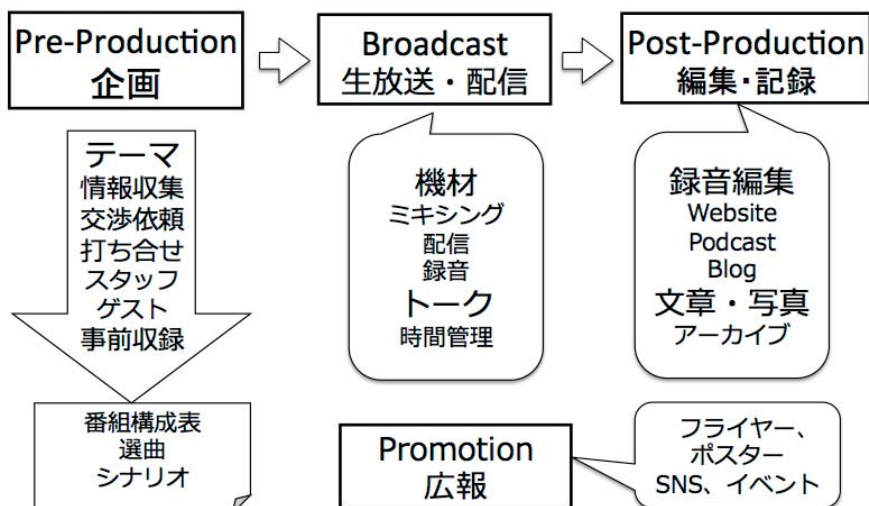


図 2-3 「HARUKANA SHOW 番組制作プロセス」西川作成



図 2-4 「2017年度『メディア文化論』実習プロセス」西川作成

希望、20名がB班を希望した。A、Bとも異なる学年が組合わさるように4名ずつに分け、チーム A1, A2, A3, A4, チーム B1, B2, B3, B4, B5 という9つのグループができた。

②の番組企画立案の作業から、教室ではグループごとに同じ机を囲んで着席する。メンバーとしての初顔合わせにおいては、学生は自分の企画書を持参し、それぞれのアイデアを持ち寄るかたちで話し合い、数回をかけてチームとしての企画を練る。毎回の授業では、出席者は授業の終わりにリアクションペーパーに、その日に出された課題や感想を記すが、その他に、大学のウェブサイトの授業に関するページから、課題フォーマットをダウンロードして、教室にあるパソコンを使って必要事項を記載し、オンラインで提出する。こうし

た作業においては、グループ内での議論だけでなく、クラス全体で企画のプレゼンテーションを行う時間をとり、第三者にも企画案を提示しながら議論を深めていく。

企画書作成に際し、A班へは、HCM から MEDIA ROCCO の特集テーマに関して2種類の選択肢、①テーマは自由、②3つのテーマ（防災とスマホ・環境保全・地域イベント）が提示された。これは2016年度の実習でテーマを自由としたために、テーマを決める段階で多くの時間を費やし構成を深める時間が十分にとれなかったという学生の意見が出たためである。また、②の3つのテーマは、MEDIA ROCCO が特集としてさらに充実させていきたいと考えているテーマでもあり、学生ならではの視点が出た特集が制作されるので

はないかと期待しての HCM からの提案である。B 班については、テーマは自由であるが、これまでの HARUKANA SHOW の各回のテーマ一覧を配布し、甲南大学の学生が参加した20あまりの回に印をつけ、番組のウェブサイトから録音を聞いて参考にするようにと伝えた。

11月中旬には、各チームから2つの企画案を提示し、A班の4チーム、B班の5チームのあいだでテーマの重なりなどを調整しながら、各チームが最終の一案に絞っていった²⁵⁾。また、各チームの企画案を、A班の場合は、HCMの企画会議にかけ、B班の場合は、HARUKANA SHOWのスタッフに送り、それぞれから丁寧なコメントを受け取った。各チームは、スタッフからのさまざまな「問いかけ」²⁶⁾を受けて、番組制作には、「話す」以前に、「調べる」段階があることに改めて気づき、どこから準備に取り組めばよいかについてのヒントを得ることができた。しかし、企画を練る段階ではどのチームもまだ、関係者への取材を行うなどの具体的な情報収集の行動には踏み出せていない。

③のリハーサルにおいては、機材設営のレクチャーを2017年度の授業で初めて取り入れた。受講生には、前節で述べた図2-1「構成概要図」と図2-2「準備物&日程」を印刷して配布し、これをもとに、情報システム室職員が、どのように機材を設定し、523教室を視聴ルームとして、525教室を番組制作・配信のスタジオとして機能させるかについて説明した。続く2回の本番リハーサルでは、臨時スタジオとなる525教室では、アメリカのWRFUラジオ局スタジオと教室のパソコンとを実際に接続、マイク、ヘッドフォンの設定をした。523教室ではWRFUのストリーム配信の受信とプロジェクターとの接続を確認した。最初、B班の2チームがラジオ・トークのリハーサルを行い、これを、A班がMEDIA ROCCOのリハーサルとしてビデオカメラで撮影し、映像をライブシェルを使ってUstreamへ配信することを試みた。また2つの教室をテレビ会議システムAVerでつなぎ、教室間で相互に映像と音声の送受信ができるようにした。

11月最終週に行った情報システム室職員による機材設営レクチャーは、学生の実習に対する意識を大きく変えた。それまで学生たちは、番組制作とは、各チームが調べたことをただ話せばよいと気楽に考えていた。ところが機材の設定や接続方法を学ぶなかで、自分たちの実習では教室で番組を制作し、それを学外の地域メディアとつなぎ、実際に放送・配信するのだという



写真2-1 「WRFU Studio, Urbana, IL, USA, Dec.20, 2017」西川撮影

ことを、ようやく自覚するようになった。

その後、学生が中心となって行うはずのリハーサルにおいても、機器の不具合が続出した。基本的な設定方法の間違いもあれば、情報システム室からの応援があっても問題の原因が解明されない場合もあった。学生たちは、トラブルの連続に対して、本当に番組を放送・配信できるのだろうかかと危機感を募らせた。また、番組のリハーサルの様子を見て、機材設定がうまくいったとしても、「問題は、自分たちが作る番組の内容だ。早く準備に取り組まなければ」と積極的な感想を述べるようになった。

12月に入ると、A班もB班も、各チームのメンバーの役割分担、番組テーマ、構成、内容解説、参考資料などを記した最終説明書を作成した。この頃から各チームは、「メディア文化論」の授業時間外に自主的に集まり、それぞれの「本番」に向けての準備を始めた。どのチームのメンバーも、異なる学年、あるいは異なる学科の学生で構成されている。授業の時間割の空時間を調整して全員が集まることが、難しい場合もある。LINEなどのSNSを利用して連絡をとり合いながら、チームによってはランチミーティングを重ねるなどして、メンバーが直接に顔を合わせて打ち合わせをする機会を作っていた。

一方、HARUKANA SHOWの通常放送では、第352回（現地時間12月15日）に、この特別放送のスケジュールを告知し、番組に参加するSKU（Students of Konan University）の各チームへの番組スタッフからのアドバイスも添えた²⁷⁾。

④の番組制作、放送・配信の本番は、2017年12月はB班のWRFUのラジオ番組、2018年1月はA班のMEDIA ROCCOの動画配信である。次節では、2017年度の「メディア文化論」のメディア実践として、先

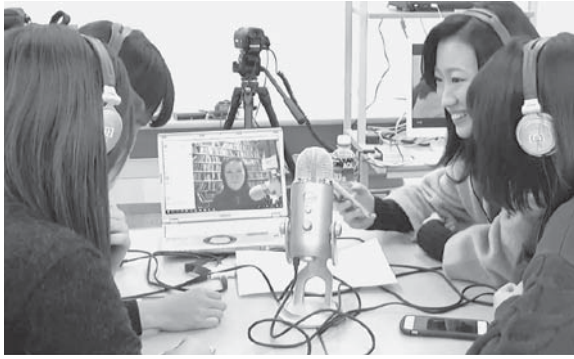


写真 2-2 「525教室で、チーム B4 による HARUKANA SHOW のトーク本番、2017年12月21日」松川撮影



写真 2-3 「放送終了後、523教室と WRFU スタジオをつなぐ」2017年12月21日 松川撮影

に行われたラジオ番組制作、放送の実習を例として報告する。

2-6 番組制作、発信—教室を WRFU スタジオとつなぐ

甲南大学の教室とアメリカの WRFU スタジオをつないだ HARUKANA SHOW 特別放送は日本時間の2017年12月21日に実施された。筆者は、先に渡米し、WRFU のスタッフとの打ち合わせを行い、また、特別放送の番組構成表を作成し、B班の各チームに送付した²⁸⁾。この日の特別番組の予定開始時刻は、日本時間の午前10時50分である。午前10時には、523教室と525教室へ機材を搬入した。辻野と SA が、社会学科、教務部、HCM からパソコン、マイク、ヘッドフォン、ビデオカメラ、三脚、ライブシェル、その他、必要な機材を借りて教室へ運び込み、情報システム室スタッフが、テレビ会議システム関連の機材などを搬入した。文学部事務室職員、教務部職員、1限に授業がない学生たちも集まり、10時10分から機材設営を開始した。この日は、B班の実習本番であるが、A班にとっては、年明けの MEDIA ROCCO の動画配信にそなえた機材設営、撮影と配信のリハーサルもかねている。また、準備と本番の様子を、松川が教室で動画と写真に撮影し記録した。一方、筆者は、HARUKANA SHOW の番組スタッフとともに、WRFU のラジオ局スタジオの機材設定を行い、甲南大学の525教室のパソコンとインターネットで接続するために待機していた(写真 2-1)。

予定では、10時30分には、全ての準備が整い、2限開始の10時40分に WRFU スタジオにいる番組ホストの筆者と教室とをつないで直前の打ち合わせをするはずであった。しかし、525教室のパソコンに、WRFU のスタジオの映像と音声がつながったのは、番組開始

直前の10時45分であった。WRFU スタジオでは、525教室からの音声は聞こえるものの映像がパソコン画面には映らず、様子が分からないまま、学生たちの「声」を頼りに、予定どおり、10時50分に放送を開始した(写真 2-2)。この時、日米の離れた場所からの参加者が、番組進行を記した構成表を共有していることによって、番組は滞りなく進行した。何よりも、出演した3チームが、自分たちで時間をはかり、15分以内にトークをおさめ、12時には放送・配信を無事に終えることができた(写真 2-3)。

特別放送を終了後、筆者は、収録音源を何度も聞き直し、再放送に向けて編集作業を行った。また、その日のうちに松川から送られてきた記録動画と写真を見て、出演したどのチームも、自分たちで練習を重ねてきたことがよくわかった。各チームとも、最初に提出した番組企画書よりも内容を絞り込み、限られた時間内で何をどのような順で話すか、構成と時間配分を考えメンバーのあいだでしっかりと共有されていた。また、トークの進行役を支えるように参加者が話をつなぎ、テーマについて調べた情報を伝えながらも、自分たちの体験を会話のなかにうまく盛り込んでいる。どのエピソードを取り上げるかについて何度か話し合ったにちがいない。会話がぎこちなく途切れることはあるが、各チームのトークを、全体として落ち着いて聞くことができた。

甲南大学の教室の映像には、学生たちは緊張しながらも、会話を楽しみ、番組終了後は、どこかすっきり安堵した表情がうつっていた。学生たちはまた、リスナーからの反応を知りたがっていた。番組を放送して終わりではなく、自分たちのトークが、どのように伝わったのかと考えるようになったことも、学生たちの大きな変化である。

教室からの番組生放送の2日後、現地の2017年12月

22日（金）に、通常の HARUKANA SHOW で、2 日前の特別番組を再放送し、また番組サイトにトークと写真と文章による説明とアメリカの番組スタッフと日本のリスナーからのコメントを添えた²⁹⁾。

2-7 多角的なフィードバックの仕組みを作る

「メディア文化論」のメディア実践は、番組制作のためには充分とはいえない機材や設備、システム環境のなかで、多くの視聴者の関心を集める完成度の高い作品制作をめざしたものではない。MEDIA ROCCO も WRFU も、会費や寄付を集め、何とか助成金を得て、機材を購入、リユースし、社会的関係や諸制度を活かし、ボランティアが時間と労力を費やし、自分たちでメディアを作り、住民の声を伝えながら、人と人をつなぐ活動を行っている。こうした草の根のメディアのあり方を大学の授業のなかで実践し、学生、教職員、地域メディアのスタッフなど異なる立場の人々が関わりながら、教室を臨時のスタジオと視聴室として作り変え、学内外をつないで番組制作・発信を行う。そこで起きるさまざまなハプニングをも含めた経験を次への課題として活かすことが、コミュニティメディアについて学ぶこの授業の特色である。

そこで「メディア文化論」の授業の作り方として重要となるのは、学生たちの「主体的な学びの姿勢」を引き出し、「他者との協働」の難しさと面白さを経験することである。大学の近くにある地域メディアや海外のコミュニティラジオにおいて実際に番組制作を担当し、表現・発信者としての立場にたたされることにより、学生たちは、目には見えない視聴者を想定し、何をどう伝えるのかを真剣に考え、番組スタッフからのアドバイスを自分で解釈して吸収し、応用していく。

他者から学び伝える授業の工夫としては、各チームの企画や番組に対して、学生どうしや、学外からコメントを得る機会をできるだけ多く作ってきた。リハーサルにおいても本番においても、他のチームの番組を視聴した感想を記し、授業時間内にそのチームに渡し、発表者がその場で視聴者からの反応を知ることができるようにした。MEDIA ROCCO と HARUKANA SHOW の番組スタッフからはメールで、各チームの企画案や放送に対するアドバイスやコメントを受け取った。ラジオ番組制作の場合は、学生による特別番組の生放送後に、通常の番組でも再放送し、番組のウェブサイトアーカイブとして公開することで、各チームが制作したトークを改めて聞き、番組スタッフやリスナーからのコメントを見ることができる。

2017年度の「メディア文化論」では、12月21日の教室でのラジオ番組制作の実習の様子を松川が撮影するとともに、アメリカでも、番組スタッフのトーマス・ガルザ（Thomas Garza）氏と筆者が、放送局のある街の風景やスタジオの準備や放送の様子をビデオカメラで撮影していた。甲南大学の教室と WRFU スタジオをつないで同時進行する双方の記録映像を合わせて、ガルザが『聞こえますか／Can you hear me?』というタイトルのドキュメンタリーに編集した。この番組の制作、放送に関わった人々（甲南大学の学生、教職員、WRFU や番組スタッフ、リスナーなど）は、異なる場所において HARUKANA SHOW から配信されるメディア空間を共有しているが、互いの状況を把握しているわけではない。このドキュメンタリーは、出演者や番組の内容だけでなく、日米の異なる場所で番組作りを支える人々の様子を重層的にとらえた「見せる教材」となっている。授業の実習を、番組制作、放送・配信、番組のウェブサイトのアーカイブ、ドキュメンタリー映像、論文という多様な媒体を通して記録・発信し、受講生を含めこの実践に関わった人々が後からそれらを視聴し、異なる角度から捉え直すことができる仕組みを作ることも、多文化社会でのフィールドワークの経験を活かしたメディア実践の方法である。

2017年度「メディア文化論」の授業の最終日には、A 班の 1 チームが番組を制作、配信し、また、『聞こえますか』（短編）を上映した。そして、HCM の活動に関わっているゲストスピーカーが自らの地域メディアでの活動について語りながら、今年度の各チームが制作した番組を視聴した感想を述べ、他のスタッフからのメッセージも学生たちへ伝えた。15回の授業の終了後、受講生は最終課題として2000字程度のレポートを提出した。ここでは、授業の実習の経験をふまえて、マスメディアとは異なる地域メディアの特性と可能性を論じ、また、今回のメディア実践から学んだことや、来年度の受講生へのアドバイスなどが自分の言葉で熱く綴られていた³⁰⁾。学生たちは、地域メディアの番組スタッフから寄せられた時には厳しいコメントに対しても有り難く受け取り³¹⁾、番組制作も発信もさまざまな人々の協働のもとで行われていることを知り触発された。多くの学生が、人の意見に耳を傾け議論すること、グループで番組を作ること、自分たちの考えを形にしていくことが楽しかったと述べていた。

「メディア文化論」における実習は、地域メディアと連携して授業を大学の外へと開き、グループワークをとおして身近な他者と協働して番組を制作し、視聴

者へ伝えるプロセスのなかで多様な対話を重ね、自分たちの当たり前を見つめ直していくことになる。「メディア文化論」を2年生で受講し、映像制作に関心をもち、3年次配当の「発展研究F」を受講する学生もいる。この章では、A班のMEDIA ROCCOの番組制作・配信の実習については、多くふれることができなかったが、続く3で、辻野が「発展研究F」を中心に映像制作の授業について詳しく述べる。

3 「発展研究F（メディアコミュニケーションと表現）」—地域から学ぶ映像制作と伝える空間創り

「発展研究F」（3年次配当）は、文学部社会学科の応用領域の5領域の1つ「メディアコミュニケーションと表現」の発展科目である。学生は、メディア実践系科目と社会調査関連科目で学んだことを活かし、甲南大学のある神戸市東灘区をフィールドとし、映像作品の企画・取材・撮影・編集に主体的に取り組む。最終的には、調査協力していただいた地域の方々を招待し、制作した映像作品の上映会を開催することにより社会とより本格的に関わることになる実習授業である。2012年度から辻野が担当している。

3-1 映像人類学との出会い

筆者辻野が映像制作に取り組むきっかけとなったのは、甲南大学人文科学研究科の大学院教育のために当時客員教授として米国イリノイ大学から来日したディビッド・プラス（David Plath）氏から映像人類学を学んだことだった。この実践的科目を通して、文化人類学のフィールドワークにおける記録と成果としての映像作品制作の重要性を学び、“Volunteers and Local Media in a Time of Disaster”をテーマとして、初めての映像作品“Over Falling Walls”³²⁾を制作、さらには、オーストラリアのメルボルンで開催された日本研究の学会で発表・上映した。この学会発表での作品上映後の質疑応答では会場から多くの質問を受け、映像のもつ力を実感する体験となった。そして日本での映像人類学の先駆者である大森康宏氏（現国立民族学博物館名誉教授）の映像人類学集中講義に学び、森田三郎氏（現甲南大学名誉教授）らが始めた映像人類学研究会に参加しながら、映像人類学の理論と実践、映像制作のスキルを深めていった。さらに2005年オランダ王国、ライデン大学に客員研究員として滞在中に、フランスのパリとオランダのアムステルダムで開催された

世界の映像人類学映画祭を見聞し、制作された民族誌映画が映画祭という空間で質疑応答を含めどのように公開されるのかを知る機会を得たことは、上映会という場の重要性を認識するきっかけとなった。

その後、映像制作実習を含めた映像人類学の授業や、メディアをテーマに、またメディアを活用したフィールドワーク実習などの学部科目を複数の大学で担当してきた。それぞれの大学における映像制作環境は異なっており、①映像制作のための設備とスタッフがいる場合、②大学の情報センターが映像制作をサポートする役割を果たしている場合、③特にそうした環境はなく担当教員の裁量で実施する場合など様々で、異なる制作環境の中で映像制作を教える経験をすることができた。またクラスの規模や実施形式（集中・半期・通年）の違いによっても授業構成が異なってくる。そして展示パネルや映像作品、さらには、読み手を意識し、手にとって読んでみようと思わせるビジュアルを活用した報告書などでフィールドワークの成果を表現するために異なる分野のスタッフと協働で授業を実施する機会を得たことにより、「多様な表現を使い他者に伝えることを意識した」授業の作り方に取り組むことにつながった³³⁾。こうした授業作りが、現在甲南大学で担当している「発展研究F」で映像制作スキルを教えるベースとなっている。

3-2 メディアがつむぐ地域ネットワーク

「発展研究F」は、学生が通学する大学周辺を取材対象エリアとしている。学生にとっては自身が通学する大学がある身近な地域であるはずだが、そこに暮らす人々や組織に接する機会は意外と少ない。この授業を通してそうした地域の日常、生活世界に目を向ける機会になればと考え、取材対象に設定している。

また、このエリアは筆者が年月をかけてネットワークを構築してきた地域であり、そのノウハウとネットワークを授業に活用している。とくに2009年から本格的に関わることとなった地域メディアの法人設立準備から運営にいたる実践の中で紡いできたネットワーク、さらにはネットワーク作りで得た経験は貴重なものである。

それが現在もボランティアで活動に関わる、特定非営利活動法人ひがしなだコミュニティメディア（以下、HCMと記す）³⁴⁾である。HCMは、その活動拠点を置く神戸市東灘区に住み、学び、働く人びとをつなぐ場所とメディアをつくるため、地域の住民、大学、商店街などの有志が2010年8月に特定非営利活動法人とし

て設立したコミュニティメディアで、筆者は設立当初からのメンバーである。HCM では地域に根差した放送局を開局することを当初の目標とし、コミュニティFM局の開局に向けてメンバーは動いていた。その一方で、その調査を進めるうちに、周波数や運営資金に関する課題があることも分かってきた。ちょうどその頃に登場したのが、Ustream という2007年に設立された動画共有サービスであり、Facebook や Twitter などの SNS であった。当時日本では一般的にあまり知られていなかったライブ動画配信サービスを提供する Ustream に、これからの放送局としての可能性を感じ、設立メンバーで何度も議論を重ねた結果、最終的にはソーシャルメディアの Ustream サイトを先駆的に活用したインターネット放送局「MEDIA ROCCO（メディアろっこ）」を開局することに決めた。そして2012年10月13日（土）、MEDIA ROCCO は開局記念番組を神戸市東灘区岡本から世界へ向けたライブ配信（生放送）として開始した。以来、毎週土曜日11：00-12：00の1時間番組を欠かさず定期的に配信し、2017年12月末で273回を数える。

放送局に関わる人たちは放送に従事するプロではなく、一般の人々であり、ライブ配信する専門的技術を共有しながら放送局を一から手作りで造ってきた経緯がある。活動に関わる人々の年齢、性別、職業など、その社会的属性は実に多様で、参加動機も一様ではない。そのため協働していくことに難しさを感じることもあるが、だからこそ多様な視点が番組に加わり多彩な番組を生み出す原動力となりうる。特定非営利活動法人という組織形態でスタートさせた HCM の特徴でもある。

そして地域メディアでありながら、インターネットによるライブ動画配信技術を活用することで、ローカルな情報が地域を越えてグローバルに発信される。番組では、地域に特化したテーマと地域を越えた現代社会共通のテーマを情報提供する番組を制作している。制作プロセスでは、多様な人たちや組織と出会い、取材やゲスト出演協力をお願いすることになり、開局から5年が経ち、地域メディア活動で培ってきた人や組織とのつながりは点から面へと拡がりを見せ始めている。

地域メディアとしての HCM が実施する事業は、上述の① MEDIA ROCCO の定期配信である放送局事業と、②イベント企画（ひがしなだメディア交流フォーラム、ひがしなだコンサートなど）、③人材育成事業（高校生・大学生向けのインターンシップ、多文化ワー

クショップ、番組制作ワークショップ）に大別される。これらの事業を展開する目的は、メディアを使い情報発信できる人たちを地域に増やしていくとともに、地域の多様な主体（個人・組織）間の交流を生みだし、つながりを創り出すことである。また事業実施の過程で地域の多様な主体との協働をも生みだしてきた。こうした東灘でのメディア活動で培ったネットワークは、「発展研究F」で学生たちが取り組む映像制作のプロセスから最終の上映会実施のさまざまな局面で活かされている。

3-3 授業実施の特徴：映像制作を通して地域の日常と関わる

当該科目は3年次配当の15回で授業を構成している。これら15回の実践的授業を通して、学生は映像制作の基本を学んでいく。映像制作のプロセスは次の3つで構成され、最終的に映像作品上映会を開催する³⁵⁾。これらすべてのプロセスを学生が主体となって行う（図3-1）。

- ①プレ・プロダクション：企画立案・情報収集・事前取材・作品構成（コンテ作り）・撮影実習
- ②プロダクション：取材・撮影
- ③ポスト・プロダクション：編集ソフト実習・編集・試写
- ④上映会

「発展研究F」のねらいとしては、基本的な映像制作のプロセスを実践的に学び、企画した内容を映像という形で表現することができるとともに、取材交渉や撮影を通して地域という身近な社会と接点を持ち、他者から学び、そして映像作品を上映することで他者へ伝える（＝フィードバック）ことである。そしてシラバスに記載してあるように、制作プロセスを通してコミュニケーション力、企画力、実践的行動力を培う授業内容で構成されている。

3年次配当のこの授業を通して、学生たちは取材交渉から本番の取材撮影というプロセスを経験しながら、学外の他者とより能動的に関わりをもち、本格的に映像制作に取り組むことになる。また取材協力者を交えた空間での上映会を授業の最終目標として設定することにより、学生たちは自身が取り組む映像制作のプロセスに他者の視点を意識し始める。作品を通じて何をどのように伝えるのか？グループメンバー間で議論し、フィールドで自ら撮影した映像記録という素材と向き

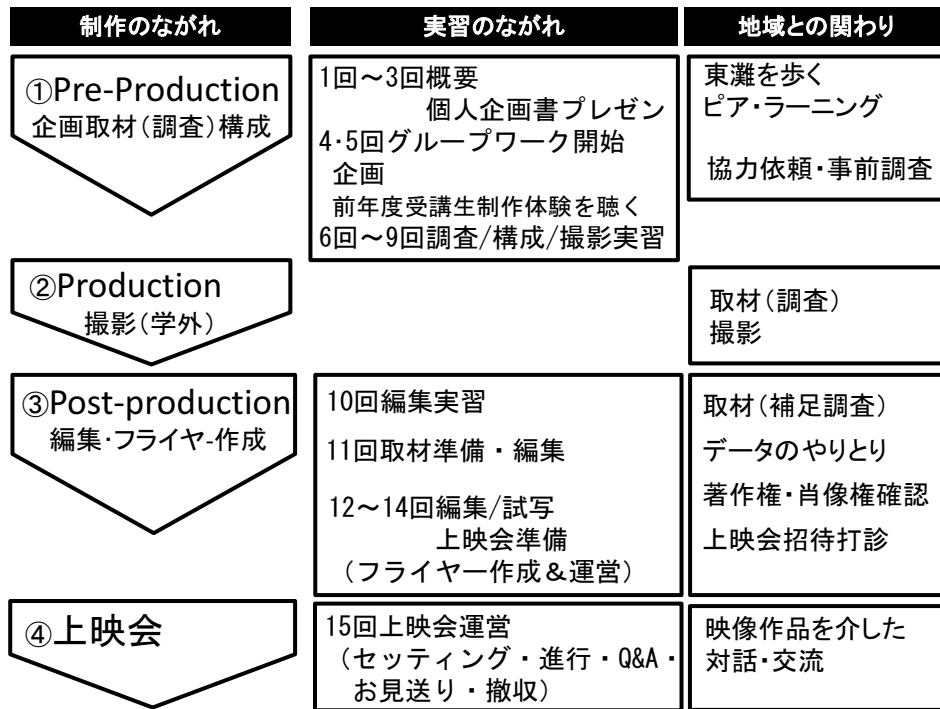


図 3-1 「『発展研究F』映像制作プロセス」辻野作成

表 3-1 「使用機材リスト」(2017年度)辻野作成

	機材	機種(使用目的)
1	ビデオカメラ	HDR-CX590
2	ビデオカメラ用外付けマイク①	SHURE
3	ビデオカメラ用ワイヤレスマイク②	URX-PPO3/UTX-B03*教員私物
4	ビデオカメラ用ワイヤレスマイク③	WM-V1*教員私物
5	三脚	
6	パソコン(Windows Os 7 Professional)	プロセッサ Intel(R)Core(TM)i5-4570 CPU @ 3.20GHz 実装メモリ(RAM) 8.00GB
7	外付け HDD	WD(生の動画データ・編集動 画データ・映像作品完成動画 データ保存用)
8	編集ソフトウェア	Adobe Premiere Elements 12

合うことにつながる。

次に、実習形式で授業を進めていく際に「他者との協働」であるグループワークを採用し、10分ほどの映像作品をグループ制作することも本科目の特徴である。1グループ4~5人で構成し、甲南大学文学部社会学科の編集用パソコンの台数の都合上、受講生数は15名程度の小規模クラスでの実施となる。

映像作品の共通テーマとして、2012年度から2014年度は「つながり」を、2015年度から2017年度にかけては「生きる」を設定し、映像制作を実施してきた³⁶⁾。

また、使用する機材はプロが使用する機材ではなく、

学生たちにも身近なビデオカメラの機種を使い、編集ソフトをインストールしたパソコンで編集する。これらの機材は基本的に社会学科が所有する機材とソフトウェアである。機種等は表3-1のとおりである。

映像制作をするために必要な機材を選ぶポイントとしては、ビデオカメラで扱う動画データがスムーズに編集できる性能をパソコンが有することと、編集ソフトのバージョンがそのパソコンにインストールしているOSの動作環境に適合していることである。つまり、ビデオカメラ、パソコン、編集ソフトの3種類のうち、いずれかを新しいものに変更する場合、残りの2種類

も一斉に変更する必要が生じることもある。

3-4 授業実施の工夫と問題

社会学科はメディアや映像の専門家を輩出することを目的とした学科ではない。そのためメディア実践系科目を履修選択する学生のメディアスキルは初心者レベルという場合がほとんどである。そのことを踏まえて、①映像制作プロセスの実際を知る機会と、②制作プロセス上での多様なサポートの機会を提供している。まず①映像制作プロセスの実際を実感してもらう機会として、映像を制作するプロセスをイメージしやすいように、授業の初期段階で、過去の受講生にゲストスピーカーとして来てもらい、その映像作品を上映するとともに、制作体験を語ってもらい、学生との質疑応答の時間を設けている。学生たちは前年度の受講生の制作体験に熱心に耳を傾け、また積極的に分からないことや知りたいことを質問する姿勢がみられる。映像に日々接して育っている学生たちにとって、映像制作はスマートフォンでもできる時代である。映像断片を適当に貼り合わせることで簡単にできると考える学生もいるが、前年度の受講生の制作体験に触れることで、実際の制作プロセスの難しさについて現実味を帯びて捉えることが可能となるようである。また、初心者レベルのメディアスキルであっても、最終的には映像制作することができるという自信にもつながっているようである。

加えて、②制作プロセス上のサポートの1つとして、前年度の受講生にSAとして授業に関わってもらうという試みも導入している。SAの役割は制作プロセスによって異なる。例えば、プレ・プロダクション段階では企画立案・取材交渉・作品の構成を作っていくので、そうした役割を前年度担っていた学生にSAをお願いしている。プロダクションからポスト・プロダクション段階では、ビデオカメラやマイクなどの機材操作、編集を担当していた学生にSAをお願いすることが望ましい。小規模クラスとはいえ、制作実習中心の授業のため、一人ひとりの作業を丁寧に見て、教えていく必要があるためSAの存在は欠かせない。その際に、SAは前年度の制作体験があるため、自身の経験を踏まえて自信をもってサポートすることができる。またSA自身も、学生を助ける立場になることにより、自分が制作に取り組んでいた時には見えなかったことに気づいたり、より理解が深まったりする。そして教員だけでなく、SAがサポートに入ることによって、学生一人ひとりの進度に合わせた効果的な対応が可能となる。

グループで制作する場合、映像制作に必要な作業と時間を分担することができるとともに、メンバーの多様な視点で分析した内容を映像作品に活かすことができる利点がある。一方で、グループ制作とは他者と協働して1つの作品を作り上げるということである。講義形式の科目と異なり、クラスメートと協働しながら授業のプロセスが進んでいくことに学生はハードルを感じるが多い。そのため、グループに分かれた直後にグループ内のコミュニケーションをとるきっかけ作りとして自己紹介や他己紹介ワークショップを取り入れている。このワークショップも学生の様子を見ながらどのワークショップが適切か検討しながら選ぶ。

例えばグループに分かれてすぐの段階では「4分割自己紹介」を使った。同じグループになった人に、自身に関する4種類の内容について話す。その際にそれらのうち1種類の内容は決まっておらず何について答えてもいい。参加者は他者に自身のどのような側面を紹介するかを考えて話すことになる。聞き手は話者の意外な側面を知ることもあり、盛りあがる。

「発展研究F」では、上記のようにグループワークのアイスブレイキングとしてワークショップを行う場合と、取材や映像制作のトレーニングの要素を盛り込んだワークショップを行う場合がある。後者のワークショップとしては、ビデオカメラを使用する、①撮影実習：他己紹介、②撮影実習：抽象的な言葉の映像表現の2種類である。

①撮影実習の他己紹介ワークショップでは、ペアとなった相手をクラスメートに紹介するためのショート作品を撮影する。その際に映像制作する上で習得が必須のビデオカメラを使い、ペアとなった相手を被写体として撮影した30秒ほどの映像作品を編集なしのedit in cameraで制作し、クラス全体で上映する。編集なしの映像作品なので、いきなり撮影するのではなく、撮影する前に時間を取り、ペアの相手と対話しながら、その人のどのような側面を紹介しようかと考え、準備してから撮影することになる。また同時に自身が被写体となる体験を経験する機会ともなる。この経験は、取材される側の立場を理解するよい機会ともなる。

②撮影実習：抽象的な言葉を映像で表現するワークショップでは、制作グループメンバーで初めての30秒映像作品制作に取り組むことになる。いずれも短い映像作品の制作に取り組むことを通して、撮影トレーニングをするだけでなく、制作に取り組むグループメンバーのコミュニケーションを図ることも目的としている。



写真 3-1 「企画：作品テーマ，生きるについて考えるワークショップに取り組む（2017年度）」辻野撮影



写真 3-2 「グループワーク：構成を考える（2017年度）」辻野撮影

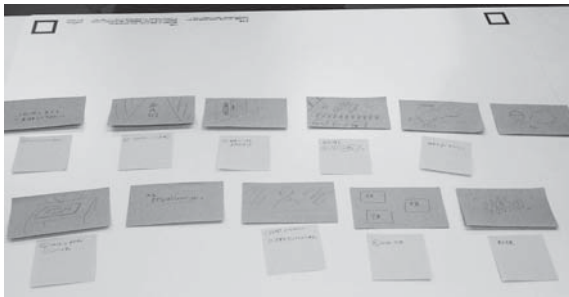


写真 3-3 「グループワーク：絵コンテを作成する（2017年度）」辻野撮影



写真 3-4 「編集作業に取り組む（2017年度）」辻野撮影

映像制作のプロセスに取り組んでいく中で、学生たちはグループメンバーという身近な他者との協働と、取材先の地域の人々との取材交渉という対外的なコミュニケーションという課題に直面する。映像作品という形にしていくためには、企画から撮影，編集のすべてのプロセスにおいてグループメンバーで意思疎通をとり、内容を決めていく必要がある。しかしながら、実習の取り組み方，他者との連絡のとり方は人によって異なっている。グループワークの進め方は，毎年の講義のはじめに決めたグループを構成するメンバーによって異なってくる。集まったメンバーでどう映像作品を作っていくのか。だれがどのような役割を担当するのか。進め方は1つではない。MEDIA ROCCO の配信現場でもその配信日に集まったメンバーで番組を制作し，配信する。集まった多様なメンバーと番組制作を進めていくには臨機応変さが求められる。「発展研究 F」でも毎年，意思疎通や役割分担の割り振りが比較的うまくいくグループもあれば，協働することの難しさに直面するグループもでてくる。

一方，取材先との交渉の難しさに直面するグループもある。学生が取材依頼文書を作成し，連絡をとり，

場合によっては再度の取材を申し込むこともある。そうした時に，学生から相談されるのが，相手からの返事がこないということである。LINE や Twitter などの SNS でのコミュニケーションに慣れている学生たちにとって，友人関係でない，初対面の他者に連絡をすること自体が初めての経験ということが多く，まずはメールで連絡をするという方法をとる場合が多く，そのメールに返信がない場合，そこでとまってしまうことが多い。そうした際に，連絡の取り方は一通りではないこと，メールでの連絡だけでなく，電話など他の連絡方法もあることをアドバイスする。学生たちは対外的コミュニケーションの難しさを経験し，試行錯誤しながら，取材を進めていくことになる。受講生の最終レポートに，「初対面の人に分かりやすく，理解を得られるように伝えるということは思っていたよりも難しいことだった。……初対面の人たちとのコミュニケーションは苦労したところではあるが，少し克服できたのではないかと感じている」と記述されている。こうした体験を，学生は自身の成長として捉えなおす

ことにつなげていく。

最後に、制作プロセスを授業として円滑に実施していくための大学施設の活用のしかたについて触れておきたい。発展研究Fでは、映像制作の各プロセスの作業内容に合わせて利用する教室を移動する（その様子は写真3-1、3-2、3-3、3-4を参照）。2017年度は以下の大学施設を利用した。

- ①企画：パソコン教室（262教室）
- ②事前調査～構成：小規模のグループワークに適した教室（社会学科調査準備室）
- ③撮影：学外
- ④編集・試写・上映会フライヤー作成：社会学科情報処理室、マルチメディア室
- ⑤上映会：国際交流センター「グローバルゾーンポルト」

各回の授業内容・利用機材に合わせて、また学生が授業に取り組みやすい空間を選択し、文学部社会学科の教室と教務部管轄の教室、それ以外の学内施設を、多様に組み合わせて授業を展開している。

3-5 伝える空間を創る

「発展研究F」の最終回では学生たちが制作した映像作品を発表する上映会を学生が主体的に運営し、開催する。上映会という空間に学生たちは取材協力者・団体を招待し、両者は共に作品を鑑賞し質疑応答を通して対話と交流の時間を過ごす。上映会の開催に関しては広報用のフライヤー作成に始まり、会場の選定、取材協力者・団体への招待の打診、当日の運営・記録までを、学生たちが主体的に取り組んでいく。この上映会開催までのプロセスを経験していくうちに、学生たちは自分たちの映像作品を「他者に公開する」ことをより意識するようになる。また、それまではグループごとの作業が中心であるが、クラス全体で取り組む上映会の準備というプロセスが加わることが上映会という共通の目標に向かって動き出すきっかけとなる。

広報用のフライヤー作成には各グループから1名ずつ担当者を募り、取り組む。使用ソフトはWindowsのパソコンならインストールされているPowerPointで作成する。もちろんAdobe Illustratorなどよりプロフェッショナルなソフトウェアを使用することもできるが、学生が自分でも身近に利用しているソフトウェアの活用可能性を広げてほしいと考え、PowerPointでフライヤーを作成している（写真3-5「2017年度上



写真 3-5 「2017年度上映会フライヤー」
黒木彩加作成

映会フライヤー)。

本科目を担当して3年目の2014年度からは、学生自身がフライヤーを作成するようにしたことで、上映会自体を意識し、映像制作に取り組むようになっていった。また毎年フライヤー作成を担当する学生は、動画編集とはまた異なる魅力に気づき、懸命に取り組むようになる。

上映会会場の選定については講義室にとらわれず、上映会開催に適した空間を毎年学生たちと検討し、大学内の異なる部署と連携し、決めていく。本科目を担当した最初の2012年度は、講義形式の教室で開催した。その時の来場者と学生たちの質疑応答の様子を見て、よりアクティブに対話と交流を生みだすしかけを上映会という空間に求めてもいいのかと感じた。これを契機に、「対話と交流」を生みだす空間創りを取り入れるようになった。2017年度までに利用した上映会の空間は以下の通りである。

- ・2012年度 講義形式教室（337教室）
- ・2013年度 コンサート開催が可能な大学のホール（甲友会館大ホール）
- ・2014年度 サイバーライブラリーのアクティブ・ラーニングエリア



写真3-6 「上映会会場の様子。写真からわかるように、会場は上映会関係者以外にも開かれた空間となっている（2017年度）」辻野撮影

- ・2015年度 アクティブ・ラーニング教室（523教室）
- ・2016年度 視聴覚ホール（図書館内）
- ・2017年度 国際交流センター「グローバルゾーンポルト」

学期が始まると、毎年筆者の上映会会場候補探しが始まる。その際に大学内の異なる部署との連携は欠かせない。教員は学内のすべての教室のレイアウトを把握しているわけではないので、教務部の教室レイアウトリストを参考に、その時に上映会として利用する教室の条件を伝え、職員からいくつか教室候補の提案をしてもらう。また教務部管轄の教室以外の空間もあるので、キャンパス内の空間を訪問し、さらにいくつか候補をリストアップする。

こうした毎年の経験から、大学内には授業として利用する目的で作られた教室やそうでない空間などハード面の資源があるが、授業という枠組みだけで考えているとそうした大学の資源に気づきにくい。またそうした空間をどう活用するかという方法にも授業の目的に合わせて多様な試みがあってもいいのではないかと考える。

そして会場候補を学生たちに提示し、学生自身がど

のような空間で来場者（地域）と時間を共有したいかを考えて会場を決めるように伝える。2017年度の場合、開かれた空間を学生たちは最終的に上映会会場として選択した。それは、異文化交流スペースである「グローバルゾーンポルト」というだれもが出入りできる場所である。壁で仕切られているわけではないので、上映会参加者以外の学生や職員も上映会の様子や映像作品をなんとなく観ることができるようになっている。この意味で、授業の一環として上映会を実施してはいるが、上映会関係者以外の他者にも開かれた空間であると言える（写真3-6）。

上映会当日のプログラムは以下のとおりである。

- ①上映会開始前：制作プロセスが分かる写真スライドショーのリピート上映
- ②上映会開始：学生の司会進行で、1作品ごとに上映し、質疑応答
- ③閉会の挨拶：学生司会の挨拶と担当教員からの挨拶
- ④閉会后自由に交流と撤収作業

上映会は完成した映像作品をただ見せる場ではなく、映像作品を介して、取材した学生と取材協力した来場者との間で対話が生まれる空間の共有である。

上映会後の学生と来場者からのコメントを紹介する。

・学生「来場者の意見を聞くことにより、自分には見えていなかった作品に関する良い点、悪い点を知ることができた。作品上映後の感想で、自分ではカメラアングルや構成について少し納得がいかない部分を、実際に見た人はその部分を良い点と受け取ってくださったり、反対に力を入れていた部分に関してアドバイスをいただいた。周りとの感じ方の差を知ることは、多くの人に受け入れられる作品を制作するうえで重要であると感じた」。

・学生「取材先の方は自分のインタビューシーンが多いとおっしゃっていたので、確かにもう少しインタビューシーンを編集し、自分たちが参加して思ったこと、考えたこと、問題点などをしっかり内容に入れればよかったかなと思った」。

・学生「今回来ていただいたオーディエンスの方は僕たちの班の人ではなかったが、すごく真剣に上映会を見て下さり僕たちのことを真剣に考えてくれていたことが伝わった」。

・来場者「4つの映像作品の中で、はじめてインタビュ

アーの顔が出てよかったです。インタビュアーが画面に出ることによって出演者のお話を受けて表情が生き生きと観客に伝わり、話の内容に入っていきます」。

・来場者「それぞれの団体の雰囲気が分かる作品ですね」。

2017年度の上映会ではこれまでよりも、来場者からの活発なコメントをいただいた。上映会という空間を共有したからこそ、学生・来場者双方に新たな気づきが生みだされ、学生は反省、感謝、手応えをじんわりと感じていく。そしてアクティブ・ラーニングならではの達成感が生まれる。

3-6 実習を実施する際に直面する課題

実習を実施していく上でいくつか課題が挙げられるが、ここでは2点挙げておきたい。

第1に技術的課題である。映像制作には機材が必要である。映像学部やメディア学部ではない大学教育の場で映像制作を実施する場合、業務用の機材を利用するわけではなく、身近に手が届く機材を使用する。ただ、どのような機材であっても、年月とともに起こる劣化と現代の非常に速い技術革新に伴う機材の変更に直面する。学生たちは日々映像と接し日常を過ごしている。また映像技術へのアクセスも格段に身近なものとなっている。そうした現代の技術社会の流れの中、大学教育の場でどのように対応していくのかは課題である。

第2に、映像作品の公開に関してである（写真3-7）。取材協力者からは教育の場での上映の許可を得ている。映画祭への出品や学外での映画祭の開催を試行する場合は今後の課題である。



写真 3-7 「映像作品は DVD に収録保管」

3-7 地域をフィールドにした映像メディアが生み出す対話と学び

「発展研究F」はビデオカメラという映像メディアを活用しながら、地域をフィールドにその日常と取材を通して接点を持ち、そこから学んだことを映像作品という形にして上映会という空間で発信する科目である。

上映会開催という授業の最終目標をめざして、学生たちは企画から始め一つひとつのプロセスで直面する課題と向き合いながら映像作品に仕上げていく。メディア実践系の3つの科目の中で3年次配当ということもあり、それまでに学んできた社会調査の手法を実際に活用し課題に取り組んでいく。地域の人や組織との出会いのきっかけをどう作っていくのか。取材（調査）ではどのように相手に問いかけ対話していくのか。取材から知りえた内容をもとにグループメンバーと議論し映像作品のストーリーをどのように構成・編集していくのか。これらすべてのプロセスが「他者との対話と協働」の繰り返しであり、学生たちは対話と協働の難しさや楽しさを体験する。

そして上映会という空間では、自分たちの映像作品がメディアとなり、来場者との間に対話が生まれる様子を体験するとき、ある学生は達成感を感じ、ある学生は取材（調査）の甘さを痛感し、ある学生は自分たちの映像作品に真摯に向き合いコメントをする地域の人々に素直に感謝する。映像制作プロセスと上映会での対話すべてが学生の学びにつながっていく。地域からの来場者にとっても映像作品を通してこれまで知らなかった地域の一面を知る機会となる。

上映会後に学生は一連の体験と改めて向き合う機会として、最終レポート作成に取り組む。その課題の内容は、①映像制作過程（プレプロダクション・プロダクション・ポストプロダクション）において興味をもって取り組んだこと・発見したこと、②映像制作過程で直面した課題とその解決、③映像作品上映会でのオーディエンス（来場者）とのやりとりを通して発見したこと、④映像作品上映会を終えて、作品を修正するとしたらどのような変更点が考えられるか、⑤来年度を受講生へのアドバイスである。レポート作成は自らの体験や気づきを書き記すという形で振り返る最後の機会であり、学生一人ひとりの心の中に学びを定着させる重要な最終作業である。

4 おわりに

以上、「創作過程論」「メディア文化論」「発展研究F」の3つの科目について、各担当者の調査研究・社会实践との関係、授業の具体的な進め方、グループワークやメディア関連の編集作業に多くの時間を割く実習科目を運営する上での難しさを紹介してきた。甲南大学文学部社会学科は、メディアを専門とした学科ではない。「総論」で西川が述べたように、3つの「メディア実践系」の科目におけるメディアは、「多様な文化のなかで暮らし、学び、伝え、人とつながるコミュニケーションツール」と捉えられている。そこでポイントとなるのは、「他者」の存在である。

「創作過程論」では、学生という「身近な他者」に自己を開く。「メディア文化論」では、地域メディアを通して、自分たちの暮らしを発信し、「他者（地域や海外）」に伝える。「発展研究F」では、学生という「身近な他者」との関わりに加え、大学が位置する地域の住民という「他者」と取材という営みを通じて関わり合いを持つ。どの科目でも、機材、教室空間が限定されている中で、履修学生たちは15回の授業の中で企画、編集、発信という一連の作業を経験する。学生たちはグループワークで協働する過程でお互いのやり方の違いに戸惑いつつ、他者との関係の中で自己を見つめ直す。また、他者に対するわかりやすい発信のために、自分のこれまでのやり方を客観的に捉え直す。「他者」の存在が自己を変えていくのである。これは大きくは「アクティブ・ラーニング」³⁷⁾の営みとして捉えることができるが、本稿ではその中でも特に、様々なレベルの他者との関わり合いを通じて生まれる「ピアラーニング」の側面を強調しておきたい。

「創作過程論」では個人でのDST作品制作の営みが主であるが、班のメンバーの間でソフトウェアの使い方についての教え合いがあり、全体プレゼンテーションでは、他の学生の作品から学ぶ。「メディア文化論」「発展研究F」でもグループでのメディア制作と発信、上映会を通じ他の学生やSAから学ぶ。授業内での企画から発信に至る過程での学生同士の気づきだけでなく、これらの授業の成果（DST作品、ラジオ番組、Ustream番組、映像作品）を通じて、教員が学生の個性を知り、担当教員同士が各メディアを通じた実践の効果を実感する。更には職員が教室内での活動の実際を知り、教員・学生のニーズを把握するという副次的効果がある。メディアを「人とつながるコミュニケー

ションツール」として捉え、「他者との関わり」を意識した実践を行うことにより、「アクティブ・ラーニング」が意味する「主体的な学び」を教室の中にとどめるのではなく、教室を越えた学生、教員、職員、地域の人々、アメリカやインドの人々との間のつながりや多角的な視点を得る可能性が広がっていく。

一人の学生の事例を出して考えてみよう³⁸⁾。Dは、2016年度後期に「メディア文化論」を履修し、2017年度前期に「創作過程論」と「発展研究F」を履修した。彼女は高校生の時からメディアに関心があり、メディア系の科目があることから甲南大学文学部社会学科を受験したという。実際に3つの科目を受講して、メディア関連の知識や編集の技術が身についた以上に、メディア制作の大変さを実感したという。3つの科目を受講する前はメディア制作会社への就職を将来的に考えていたが、現在ではPRの仕事にも関心がある。それは、「発展研究F」で上映会のためのチラシ（フライヤー）制作を担当し、「伝えること」の面白さと難しさを経験したからである。彼女は自分の班の中で編集作業を担うことを希望していたものの、グループワークにおける分担の中で上映会のチラシ制作の役割を担うことになった。4つの班の作品における共通点を見出し、チラシにまとめることの難しさを経験したが、達成感もあったという³⁹⁾。他者を意識して「伝える」ことへの関心が彼女の中にはしっかりと育っているようにみえる。

また、教員・職員にとっての気づきも重要である。「ピアラン勉強会」で創作過程論のDST作品を上映した際に、ある職員は「事務室で対応しているだけではみえない学生さんの姿が見えて興味深い」との感想を述べていた。教員は、互いの授業の様子を報告しあうことで、3つの科目を通じての個別の学生の興味関心の変遷や成長を連続的に捉えることができる。機材の設定等で学内の様々な部署のサポートを得ることで教員・職員の間での新たな発見もある。「他者から学び、伝える方法」を中心とした「メディア実践系」授業を作っていくことは、このように、教室という場所を越えたピアラーニングの営みとして展開していく可能性を持つ。今後も3つのメディア実践系科目での経験を他の科目に応用できないか考えていきたい⁴⁰⁾。

謝辞

「創作過程論」の授業で実施しているDST作品の制作に関わるきっかけを与えてくださった Alito Siqueira 氏に感謝いたします。「メディア文化論」に

においては、ひがしなだコミュニティメディアとWRFUの協力と支援をえて、国内外の地域メディアと連携した実習を行うことができました。MEDIA ROCCO, HARUKANA SHOWのスタッフからは、学生たちの企画、番組制作、放送・配信にあたって、鋭い指摘と暖かい励ましをいただき、またゲストスピーカーとして教室に来ていただきました。「発展研究F」の実施にあたり、地域の皆様には、学生の調査や取材において、学生たちを暖かく見守り、時には厳しく接してご協力いただきました。そして森田三郎氏やDavid Plath氏には、甲南大学において映像人類学と出会うきっかけをいただいただけでなく、現在も、メディア実践系科目の授業や地域における活動においてアドバイスをいただいております。「ピアラーニングについて考える勉強会」では、授業作りの可能性を広げ、深めていくうえで、大学教職員の皆様との情報交換と議論が、大きな刺激と学びとなっています。心より感謝申し上げます。

注

- 1) この「ピアラーニングについて考える勉強会（ピアラン勉強会）」の詳細については、西川による『「メディア実践系」授業の作り方（総論）」を参照のこと。
- 2) 詳しくは松川（2014）を参照のこと。
- 3) インドの教育制度において、日本の大学に相当するのはカレッジ（College）で、3年制である。インドのUniversityは、提携カレッジを統括して学位を授与するとともに、修士・博士の大学院プログラムを持つ。シークエイラが主に担当していたのは、カレッジを修了し、社会学の修士号を取得するべく、学んでいた学生たちだった。
- 4) 日本の高校に相当するのは、2年制の上級高等学校（Higher Secondary School）である。
- 5) Storycenterのウェブサイトを参照のこと。
- 6) Windowsムービーメーカーは、Microsoft社がWindows Essentials 2012スイートのサポートを2017年1月10日に終了したのに併せ、ダウンロードが不可能になった。2017年12月時点では、インストールしたパソコンでは使用できているものの、今後のDST制作はAdobe Premiere Elementsで行っていく必要性に迫られると予想される。このように、ソフトウェアが利用できなくなると、教員も新しいソフトウェアの使い方に習熟する必要がある。メディア実践系授業は、状況が変わる度に対応が必要とされ、機材に関する情報収集を常に行うことが欠かせない。
- 7) 「遊び」については、小川（2016）も自身の「メディア・コンテ」のワークショップを行っていく上で重要であると指摘している。
- 8) 抽選で40人のクラスであるが、例年、ワークショップ形式の授業まで残るのは35人程度である。最終的に

DST作品を提出した学生数は、2014年度36人、2015年度34人、2016年度33人、2017年度38人だった。

- 9) この動画は、YouTubeで視聴可能である。
- 10) この教室では、机と椅子が可動式であるため、自由に動かし組み合わせることができる。また、ポータブルのラップトップパソコンが常備されているため、グループワークで活用することができる。更に壁面にホワイトボードが設置されているとともに、異なる角度で投影できるプロジェクターがある。グループでの議論の内容を提示し、クラス全体で共有することができる。
- 11) 後期開講の「メディア文化論」において、前期に開講された「創作過程論」を履修した学生がいるため、ラジオ番組制作のトークの練習や収録に、各グループがスムーズに取り組むことができた。
- 12) スマートフォンに録音機能が付いていない学生には、社会調査工房のICレコーダーを貸与して対応している。
- 13) 2018年度から、システムがアップグレードされ、学生がファイル保存に使える容量が増えるため、今後はこのような問題は起こらないと考えられる。
- 14) 参考までに2016年度に制作されたDST作品の全作品のタイトルを以下に紹介する。

表注-1 「2016年度創作過程論 DST 作品リスト」

1班	
①-1	My Story…
①-2	4日間の海外旅行
①-3	彼らが教えてくれたこと
①-4	私の家族
①-5	タイトルなし（姉妹について）
①-6	本当の仲間
2班	
②-1	自分が今やっていること
②-2	私がいまやっていること
②-3	私の地元～西神～
②-4	私の地元
3班	
③-1	思い出の場所
③-2	タイトルなし（庭について）
③-3	twins
③-4	タイトルなし（犬について）
③-5	現役生活
③-6	私の小さい家族
5班	
⑤-1	沖縄旅行
⑤-2	私のうさぎ
⑤-3	タイトルなし（バレエについて）
⑤-4	身長×小6×運動会＝成長
⑤-5	双子
6班	
⑥-1	私の誇るべきもの
⑥-2	甲南キャンプ
⑥-3	僕の音楽ライフとPAの仕事
⑥-4	タイトルなし（猫について）
⑥-5	地元淡路～島で生きるということ～
⑥-6	ハル

- 15) 1位から3位までの作品を制作した学生には、賞品(菓子)を渡し、表彰する。また、1位の作品が出た班にも、グループで良いパフォーマンスができたということで表彰する。
- 16) 「創作過程論」の授業では実施していないが、教員が制作したDST作品を学生に示すことで、学生の教員理解が深まるという効果があると考えられる。松川が担当している2年生対象のゼミで、最初の活動として、自己紹介のPowerPointファイルを作成し、プレゼンしているが、これも「身近な他者」理解促進のための試みである。ゼミでは、松川も自身の自己紹介ファイルを作成し、紹介している。
- 17) 西川のアメリカを中心としたメディア実践の経緯と調査研究の詳細は、西川(2012, 2013, 2014)、メディア実践をととしたアクション・リサーチとしての方法論については西川(2016)を参照。また、2015年度からは、科学研究費補助金(基盤研究B)「海外学術調査」(研究代表者・西川麦子)「多文化社会における“コミュニティ”活動とメディア戦略に関する実践的研究」を得て、日英米におけるフィールドワークとメディア実践を継続して行い、そこで学んだ実践法を「メディア文化論」におけるラジオ番組制作や、「フィールドワーク研究」における「ZINE大会」(西川2017)などのアクティブ・ラーニングの方法として応用している。
- 18) HARUKANA SHOW Podcast No. 184, Oct. 2, 2014 「日本語の一人称の多様さ」with Konanseis.
- 19) ライブシェル(Liveshell, Cerevo社)とは、パソコンを使わず高画質の映像をライブ配信できる小型配信機器で、Ustreamをはじめとする配信サービスを使いライブ配信を行う。その他にYouTube Live, ニコニコ生放送, brightcove, Jstreamなどの配信サービスにも対応している。
- 20) 西川が渡米し、WRFUの会議に出席し、甲南大学の「メディア文化論」の授業の取り組みについて説明、依頼し、「特別番組の放送枠」の承認を得た。また、実習を実施した後は、改めて会議で報告している。毎年、現地で依頼と報告を行うことで、WRFUのメンバーからの理解と全面的な協力を得ている。MEDIA ROCCOもWRFUも辻野、西川が、地域メディアにおける顔が見える関係を積み重ねて、大学との連携が可能となる。
- 21) インターネットビデオ通話サービスとして、実習では、Skypeあるいは、Googleのhangoutを利用した。
- 22) 2017年度の「メディア文化論」の実習においては、甲南大学の認証システムが改善され、個別のパソコンにIPアドレスを振り当てなくとも、教室からのインターネットの接続が安定した。
- 23) メディア機器の所在について教務部や情報システム室に問い合わせるなかで、たとえばライブシェルのような、特別な目的に使う機器なども授業のために大学から借りることができた。ただし、教員が個人的に使い慣れた機器とは異なり、借り出した機器の設定などに手間がかかり、「メディア文化論」の実習におい
- ても、他の機器との接続など想定外のトラブルが続出した。事前の準備が重ねて必要となる。
- 24) さらにMEDIA ROCCOとHARUKANA SHOWのスタッフが、図2-1をもとに、それぞれのスタジオでの番組制作、放送・配信の仕組みを図式化した概要図を作成し、「メディア文化論」の授業資料として辻野と西川へ提供された。
- 25) A班のMEDIA ROCCOの特集番組のテーマは、A1「六甲アイランドサマーイブニングカーニバル」、A2「今と昔って何が違うの?～阪神淡路大震災から探る地域のつながりの大切さ～」、A3「自然災害の対策～台風～」、A4「あなたの知らない世界の年越し」である。B班のHARUKANA SHOWのトークのテーマは、B1「若者ことば」、B2「ミニマリストになるとしたら」、B3「居酒屋文化」、B4「先輩・後輩の上下関係」、B5「日米の学校給食」である。
- 26) たとえば、「Schoolと学校—給食から考える」というラジオ番組の企画に対しては、HARUKANA SHOWのスタッフからは次のようなコメントが返ってきた。「日本の学校給食は、第二次世界大戦後にアメリカを中心とした占領軍(GNQ)の政策として始まったのではないのでしょうか。そういったことも含めて、日本の小学校で『当たり前のこと』として体験してきたものが、どういう理由や歴史があって存在しているのかを考えてみるのもためになると思います。(逆に、アメリカではどういう理由や歴史があって日本とは異なっているのか、を考えることも)。「サブタイトルに『給食から考える』とあるように、今回はひたすら給食、ランチタイムに焦点を絞ったほうが、より作りやすくなるかもしれません。『登校の違い』に関していえば、特に北米では『子どもを路上で一人歩きさせるのが危険』という理由で、親が車で送ったりすることが多い場合もあり、子どもの登校の比較は、単に学校文化の違いでは語りえない、治安や社会情勢の問題などがとても深く関わってくる部分があったりします。テーマを学校の中の状況、しかもお昼ご飯という部分だけにクローズアップするほうが、より制作しやすくなるかと思います」(一部抜粋)。
- 27) 番組スタッフからSKUへのアドバイスとして、①しっかり準備しつつ、シナリオは読まず(慣れていないと棒読みになる)、トークの進行の大きな構成を頭に入れておく、②グループでの会話をスムーズにするには、進行役を決めておく、③自分たちが普段使っている単語でも、日本語ネイティブでないリスナーにも分かりやすいように、説明を加え、具体的な例を出すとい、という話をした(HARUKANA SHOW Podcast No. 352)。
- 28) 「メディア文化論」のB班の実習の本番前には、西川からは各チームにメールを送り、番組の進行を確認し、「トークの内容が人を傷つけないように十分に配慮し、話者がお互いを引き出し、会話を楽しみ、リスナーと情報を丁寧にシェアする」とこれまで述べてきたアドバイスを伝えた。
- 29) 2017年度のB班5チームが出演した特別番組は、現

- 地時間の2017年12月20日、27日、2018年1月3日の3回にわたって生放送・配信した。その収録を編集して、12月22日、29日、1月5日、1月12日の4回にわたり通常の金曜日の番組で紹介した。学生のトークに対して、日本、アメリカ、韓国在住の番組スタッフから多角的なコメントが寄せられた。これらは、HARUKANA SHOW ウェブサイトの Podcast No. 353, 354, 355, 356 に、音源、トークの概説、コメント、写真を合わせて掲載している。
- 30) ある学生は、来年度の受講生へのアドバイスとして次のような内容を記していた。「テーマを設定する際に、自分たちにとって『興味があること』も大切だが、自分たちが『伝えたいこと』からテーマを決める方がよい。興味があることは、きっとすぐに話題も決まりトークも円滑に進むと思うが、自分たち本位になり視聴者からするとあまり面白くなってしまふことがある。自分たちが伝えたいことを掘り下げてテーマにすると、そこに向かって話がすすみ、視聴者にも問いかけ一緒に考えやすい」。
- 31) 阪神淡路大震災を特集テーマに扱ったチームのある学生は、次のような内容を記していた。「HCM スタッフの方々からのコメントにもあったが、私たちの何気ない仕事、表情、言葉使いや行動が、震災を経験している視聴者の方が見ると不快に感じたところもあっただろう。配慮が足りなかった。準備の段階では気をつけようと思っていたのに、本番では緊張してうまくいかなかった。また、完璧な言葉、完璧な内容で番組を作ろうとしてしまった。これではマスメディアと変わらない。もっと自分の言葉で自分の身近な内容を扱い、今の若者の目線から議論することもできただろう。もっと時間をかけた丁寧な打ち合わせが必要だった。準備不足だった。反省だけに終わらず、この経験を生かしていく」。このレポートの最後には、HCMのスタッフから受け取った厳しいコメントに対する感謝が記されていた。
- 32) 『Over Falling Walls』は、阪神淡路大震災を契機に誕生した多文化・多言語コミュニティ放送局「FMわいわい」（兵庫県神戸市長田区）が、日本人住民と外国人住民の間にあった壁を崩し、交流を生み出していく情景を描いた映像作品（乾清可氏との共作、1997年）。オーストラリア、メルボルン大学、Japanese Studies Association of Australia and Japan Anthropology Workshop にて発表・上映。
- 33) 「他者に伝えることを意識した」授業作りの成果は、辻野理花他編著（2012）で詳しく述べている。
- 34) 特定非営利活動法人ひがしなだコミュニティメディアのウェブサイトを参照。
- 35) 甲南 Ch. 「ビデオカメラを手にキャンパスから地域へ：社会学科のメディア実践系科目『発展研究F』」参照。
- 36) 2017年度「発展研究F」で制作された映像作品のタイトルは以下の通りである。①「東灘の居場所とは～東灘地域助け合いネットワーク～」②「異国で生きる人々への支援～東灘日本語教室～」③「地域と生きる～東灘こどもカフェ～」④「食卓を支える仕事を知る～仲卸業者の一日の活動～」。これらの映像作品はDVDに収録し保管している。
- 37) 中央教育審議会が平成24年8月にまとめた「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」の用語集において、「アクティブ・ラーニング」は以下のように説明されている。「社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」。
- 38) 2017年12月20日に行ったインタビューより。
- 39) 彼女は、現在は2017年度の「メディア文化論」でSAとして、受講生たちのサポートをする立場にある。自らの昨年度の授業での経験を思い出し、昨年度はできなかった機材の接続ができるようになったと嬉しそうに話した。「創作過程論」「発展研究F」のSAも過年度の受講生の中から授業サポートに入ってもらっている。3つのメディア実践系科目の受講を通じて学生がどのように成長し、何を得たと考えているか。これについては、西川が総論でも3人の学生の事例を紹介していたが、今後改めて注目していく必要がある。
- 40) グループワークを中心とした実習であり、企画から成果物の制作という一連の作業を経験するという意味では、社会調査の方法を学ぶ「社会調査実践研究」（3年次担当、通年科目）もメディア実践系科目と共通している。

参考文献・資料

参考文献

Lambert, Joe

・2009 *Digital Storytelling, Capturing Lives, Creating Community (third edition)*, Digital Diner Press.

松川恭子

・2012 「デジタル・ストーリーテリング (DST) を利用した地域文化の理解・発信に向けて：奈良の事例を中心として」『総合研究所所報』vol.20, pp.45-62

・2014 『「私たちのことば」の行方～インド・ゴア社会における多言語状況の文化人類学』風響社

西川麦子

・2012 「コミュニティラジオをグローバルに開く：アメリカ、イリノイ州、WRFU-LP の日本語番組の試み」『甲南大学紀要文学編』No.162, pp.51-68

・2013 「運動としてのコミュニティ・メディア：アメリカ、イリノイ州、WRFU-LP とグローバルなネットワーク」『甲南大学紀要文学編』No.163, pp.133-152

・2014 「地域の多様性をつなぐメディア実践：アメリカ、イリノイ州、アーバナ・シャンペーンのメディア表現者たち」『甲南大学紀要文学編』No.164, pp.113-132

・2016 「アクションリサーチ法」工藤保則、寺岡伸悟、宮垣元編『質的調査の方法：都市・文化・メディアの感じ方』第2版、法律文化社、pp.144-155

- ・2017「現代のコミュニケーション・ツールとしての ZINE：顔が見える他者を引き寄せるメディア」『甲南大学紀要文学編』No.167, pp.51-66

小川明子

- ・2016『デジタル・ストーリーテリング：声なき想いに物語を』リベルタ出版

辻野理花

- ・2006「阪神大震災とラジオから映像記録を考える」森田三郎編著、『文化研究における映像と音（声）利用の可能性：大学教育現場への適用を前提として』平成16-17年度科学研究費補助金（基盤研究C）課題番号16520515, pp.67-73
- ・2008「映像制作と異文化交流—朝鮮学校の事例を中心に」森田三郎編著、『文化学習における映像と音（声）の利用法：大学と社会をつなぐメディア実践』平成18-19年度科学研究費補助金（基盤研究C）課題番号18520636, pp.27-36

辻野理花他編著

- ・2012『つながるためのくしくみ>をいかに作るか？：協働的表現の実践とその可能性をめぐって』津田塾大学ソーシャル・メディア・センター

映像作品

Garza, Thomas 編集, 松川恭子, Thomas Garza, 西川麦子撮影

- ・2018『聞こえますか/Can you hear me?』（長編41分46秒, 短編22分48秒）, HARUKANA SHOW org.

Soundarajan, Thenmozhi

- ・1999 *MomnotMom*

<https://www.youtube.com/watch?v=czoSEn8YSwo&t=20s>

辻野理花・乾清可共同制作

- ・1997 *Over Falling Walls*

URL

Grassroots Media Zine: <http://grassrootsmediazine.org/>

HARUKANA SHOW: <http://harukanashow.org/>

HARUKANA SHOW Podcast:

<http://harukanashow.org/archives/category/harukanashow-podcast>

- ・No.184, Oct.2, 2014「日本語の一人称の多様さ」with Konanseis: <http://harukanashow.org/archives/3335>
- ・No.353, Dec.22, 2017, SKU Special「日本の居酒屋文化」with チーム B4,「日米の給食」with チーム B5: <http://harukanashow.org/archives/9339>
- ・No.354, Dec.29, 2017, SKU Special「先輩・後輩の上下関係」with チーム B3: <http://harukanashow.org/archives/9388>
- ・No.355, Jan.5, 2018,SKU Special「若者ことば」with チームB1: <http://harukanashow.org/archives/9423>
- ・No.356, Jan.12, 2018, SKU Special「ミニマリストになるとしたら…」with チーム B2: <http://harukanashow.org/archives/9449>

甲南 Ch.:

- ・「ビデオカメラを手にキャンパスから地域へ：社会学科のメディア実践系科目『発展研究F』」（2017.4.3）
<http://ch.konan-u.ac.jp/news/540>

- ・「アメリカに届ける“KIKOEMASUKA?”（聞こえますか？）—文学部社会学科『メディア文化論』での地域メディアとの連携の試み（その1）」（2018.1.24）
<http://ch.konan-u.ac.jp/news/771>

甲南大学文学部社会学科「社会調査工房オンライン」:

<http://kccn.konan-u.ac.jp/sociology/research/>

MEDIA ROCCO —カイクス on Vimeo:

<https://vimeo.com/mediarocco>

- ・2016年度メディア文化論 A2 班 MEDIA ROCCO 制作番組「家族の団らんとなべ料理」
<https://vimeo.com/198567918>
- ・2016年度メディア文化論 A3 班 MEDIA ROCCO 制作番組「保久良神社への道のり」
<https://vimeo.com/198569080>
- ・2017年度メディア文化論 A4 班 MEDIA ROCCO 制作番組「あなたの知らない世界の年越し」
<https://vimeo.com/252333163>
- ・2017年度メディア文化論 A3 班 MEDIA ROCCO 制作番組「自然災害の対策～台風～」
<https://vimeo.com/252331375>
- ・2017年度メディア文化論 A1 班 MEDIA ROCCO 制作番組「六甲アイランド サマーイブニングカーニバル」
<https://vimeo.com/252311897>
- ・2017年度メディア文化論 A2 班 MEDIA ROCCO 制作番組「今と昔って何が違うの？～阪神淡路大震災から探る地域のつながりの大切さ～」
<https://vimeo.com/252495548>

MEDIA ROCCO Ustream ライブ配信視聴チャンネル:

<http://www.ustream.tv/channel/mediarocco>

文部科学省:

- ・「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm

用語集

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf

Storycenter: <https://www.storycenter.org/>

・International Health & Human Rights:

<https://www.storycenter.org/international-health-human-rights>

特定非営利活動法人ひがしなだコミュニティメディアホームページ: <http://mediarocco.jp/>

WRFU: http://www.ucimc.org/wrfu_104_5/

全て2018年1月30日最終アクセス